# 正信偈簡易講話

340
44

始

# 正信念佛偈

歸二命無量壽如來一、南二無不可思議光一、
法藏菩薩因位時、在二世自在王佛所一、
覩二見諸佛淨土因、國土人天之善惡一、
建二立無上殊勝願一、超二發希有大弘誓一、
五劫思二惟之一攝受、重誓名聲聞二十方一、
普放二無量無邊光、無礙無對光炎王、
清淨歡喜智慧光、不斷難思無稱光、

超日月光照塵刹、一切群生蒙光照、
本願名號正定業、至心信樂願爲因、
成等覺證大涅槃、必至滅度願成就、
如來所以興出世、唯說彌陀本願海、
五濁惡時群生海、應信如來如實言、
能發一念喜愛心、不斷煩惱得涅槃、
凡聖逆謗齊回入、如衆水入海一味、
攝取心光常照護、已能雖破無明闇、
貪愛瞋憎之雲霧、常覆眞實信心天、



譬如日光覆雲霧、雲霧之下明無闇、
獲信見敬大慶喜、卽横超截五惡趣、
一切善惡凡夫人、聞信如來弘誓願、
佛言廣大勝解者、是人名分陀利華、
彌陀佛本願念佛、邪見驕慢惡衆生、
信樂受持甚以難、難中之難無過斯、
印度西天之論家、中夏日域之高僧、
顯大聖興世正意、明如來本誓應機、
釋迦如來楞伽山、爲衆告命南天竺、

龍樹大士出於世、
宣說大乘無上法、
顯示難行陸路苦、
憶念彌陀佛本願、
唯能常稱如來號、
天親菩薩造論說、
依修多羅顯眞實、
廣由本願力回向、
歸入功德大寶海、

悉能摧破有無見、
證歡喜地生安樂、
信樂易行水道樂、
自然卽時入必定、
應報大悲弘誓恩、
歸命無礙光如來、
光闡橫超大誓願、
爲度群生彰一心、
必獲入大會衆數、



得至蓮華藏世界、
遊煩惱林現神通、
本師曇鸞梁天子、
三藏流支授淨教、
天親菩薩論註解、
往還回向由他力、
惑染凡夫信心發、
必至無量光明土、
道綽決聖道難證、

卽證眞如法性身、
入生死園示應化、
常向鸞處菩薩禮、
焚燒仙經歸樂邦、
報土因果顯誓願、
正定之因唯信心、
證知生死卽涅槃、
諸有衆生皆普化、
唯明淨土可通入、

萬善、自力貶勤修、
三不三信、誨慇懃、
一生造惡値弘誓、
善導獨明佛、正意、
光明名號顯因緣、
行者正受金剛心、
與韋提等獲三忍、
源信廣開一代教、
專雜、執心判淺深、

圓滿、德號勸專稱、
像末法滅同悲引、
至安養界證妙果、
矜哀定散與逆惡、
開入本願、大智海、
慶喜、一念相應、後、
卽證法性之常樂、
偏歸安養勸一切、
報化、二土正辨立、



極重、惡人唯稱佛、
煩惱障眼雖不見、
本師源空明佛教、
眞宗、教證興片州、
還來生死輪轉、家、
速入寂靜無爲、樂、
弘經、大士宗師等、
道俗時衆共同心、

我亦在彼攝取、中、
大悲無倦常照我、
憐愍善惡、凡夫人、
選擇本願弘惡世、
決以疑情爲所止、
必以信心爲能入、
拯濟無邊、極濁惡、
唯可信此高僧、說、

以上六十行一百二十句

# 正信偈簡易講話

本文は依頼者の手元に存する筈なるも、借覽を頼みたるに更に回答なし、止を得ず原稿よりいろいろ集めて之を綴りたれば欠缺の點は筆者の責任たり俗佛居士識す

## ○前　文

今春良照法友より正信偈の要義を簡易なる講話體に記せよと請求せられ、漫然に承諾して日月を送りし



に督促再三に及び謝するに辭なし、然るに余元より淺學にして迚も安んじて人に示す程の講話は出來ざるなり、從來披見したる末書は六要抄、正信偈大意の外、要解、刊定記、文軌、勦說、蹄涔記等に過ぎず、それも大方は記憶せず、樸公(僧樸師)の五部評に托して折々彼書を披見する位のことなり、其外は石泉師の要訣を二三回讀みたる耳にて他の講錄は手に觸れたることすらなし、五部評は余が頗る敬服する所なれば彼の錄に依りもたれて講話を記せんと試

みたれども、左樣にしては反つてくだ〳〵しくなりて照公の來意にも相應せず、愚が得意の講話にも成り難きの感あり、由て其事をやめ單に六要抄並に大意の釋を指南と仰ぎ、其餘は只今日愚が心頭に浮み來れる儘を記すこと丶決心したり、余は輓近の謂ゆる宗乘學の風を餘り好まぬ故に、從來宗乘學者的の講究に從事せしことなし、故に余が講話は彼學者の眼に觸れなば粗末千萬なるものならんも、余は余の信仰上より自得せる儘を記すより外に道なければ、照公もし意に慊らぬ所は彼の學者に就て問はるべし、是れ余が豫じめ斷り置く所なり、然るに之を研鑽せんとするに劈頭に心得置くべき事は、總じて經文であれ論釋であれ佛祖の文言を以て示し玉ふものは何れも文字般若にして、その眞意を知ることは謂ゆる唯佛與佛の智見なるものにして、佛智に入らねば佛意を知ることはならず、祖師の域に至らねば祖意を知ることはならぬなり、爾らば如何にして今日の凡夫佛祖の眞意に契ふことを得べきやと云ふに、他力

門にて云はゞ謂ゆる至心信樂己れを忘れて佛智願海に歸入し、爰に始て佛祖の眞意に契ふことを得べし、され共是れ自身出離の一段に取ての事のみ、聖教の文句や法門の微細なる區分を辨別する等の事は是又其門に入り修學研精の功を積まずしては叶はぬ事である、右の如く信心と學解と兼備したる人は佛門の龍象として法燈を末世に揭げ、佛祖の御代官として恥ぢざる眞の善知識なるべし、余輩の如きは斯る高德には梯立てゝも及びなき淺學庸流にして、佛門中の贅物たるに過ぎず、只幸に他力信心の一理を聽聞し攝取不捨の大益を仰ぎて恩海の無限なるを感謝の微衷より、聊か聖教を披閲し五三の末書を手に觸れて大法門海の一滴を玩味し、同朋と共に无上の幸福を感戴せんと自身の分限に應じて教人信の一端に擬せんとすれ共、夫も動もすれば名利に相應して不淨說法の罪過を知らず識らず犯しつゝある分齊なるのみ、斯る蝙蝠僧の分齊を以て祖師大權の法文を講話せん抔は僭越無慚の至りにして冥の照覽萬々恐れあ

るのみか、必ずや祖典の文意を誤ること少なからざるべし、此義幾重にも讀者の注意を祈る。

## ○正信偈講話

此正信偈製作の緣起は本典總序と行卷偈前の文とが夫である、總序は六軸の序文なり、此偈亦た六軸中の文なれば總序に示されたる緣起が又此偈の緣起である、序中特に末尾の文に爰愚禿釋親鸞、慶哉西蕃月支聖典東夏日域師釋難遇今得遇、難聞已得聞、



敬信眞宗教行證、特知如來恩德深、斯以慶所聞、嘆所獲矣、卽ち三經七祖の釋に依て自ら眞宗の教行證を敬信し、感謝の餘り所聞を慶喜し所獲を讃嘆して普く有緣に示すとあるが六軸の緣起にして亦た此偈の緣起なり、次に行卷偈前の文には凡就誓願より他力眞宗之正意也と云ふ迄の一段と、是次より作正信念佛偈までと都合二段の文である、前の總序は廣く六軸に被り、此偈前の叙は單に一偈の緣起なる故に文意一層狹く深し、卽ち上に他力眞實の

行信證果を結嘆し、次に曇鸞師天親願生偈の世尊に仰告し玉ふ句の釋文を引證して爾者歸二大聖一眞言一、閱二大祖一解釋一、信二知佛恩一深遠一作二正信念佛一偈一とありて、經釋の指南に依て自身に已證せる選擇本願の行信を讃嘆し、普く有縁を勸むるの偈を作られたものである。

次に一偈の大體を述べば古德の說の如く三朝高僧の釋文に依て一宗大綱の要義を述べられたる者なるは勿論なるが、扨、其大綱とは何物なるやと云ふに、



正信念佛が其である、宗祖御一代の自行化他全く此行信二法の活動より外はない、六軸の本書は何を光闡せられたか、正信念佛を光闡せられたのである、二法立ちて无上の妙果之に從ふ、因中に果を攝するが故に二法卽他力眞宗の大綱要義である、豈唯だ宗祖一代御化導の大綱たるのみならんや、三經七祖所レ詮の大綱亦たこの正信念佛に結歸す、彌陀は正信念佛を以て諸佛不共の正覺を唱へ、他力絕對の攝化を施し、釋迦は本佛の悲願に乘じて五濁惡世に出現

し正信念佛を說て其本懷を顯したるに非ずや、七祖の相承云ふにや及ぶ、試に彼の三十頌を味ひ看よ、其佛本願力、聞名欲往生至不退轉、聞法能不忘、見敬得大慶、卽我善親友と、是れ釋尊の正信念佛偈に非ずや、彌陀章を看よ、人能念是佛、至是故我常念、若人種善根、至卽見佛と、是れ龍樹の正信念佛偈に非ずや、願生偈を看よ、世尊我一心、至安樂國、是れ天親の正信念佛偈に非ずや、鸞師の讃偈、導師の禮讃、其實みな正信念佛偈に非るなし、

是の如く彌陀召喚の肝心、釋尊發遣の要義、三國七祖自信勸化の骨目、正信念佛の外なしとすれば、誠に知んぬ他力一乘の大法門海卷て此二法に攝入するものなることを、今一歩進めて云はゞ獨り他力教のみではない、凡そ一代佛教に於る自利利他の大綱要義を一言以て盡さば正信念佛の外は无いのである、正信以て佛智を開き其上に佛行を行ずるが念佛である、正信念佛を換言せば安心報謝である、他力教の大綱が安心報謝の二門に盡くる如く、自力教の大綱

も安心報謝の二つを出でぬ事は諸宗の法門皆な然りぢや、此の如く一代佛教を貫通して修行の大綱たるが正信念佛の二要件なるが故に、今は特に他力絶待の正信念佛に就て佛祖相傳の眞意義を嚴探せられたるが此偈の大體と私は味ふて居るのである、次の解題に就て述んに、古德已に釋して正は邪に對し傍に對し雜に對すと云ひ、信は疑に對す、今はこれ行に對するなり、所行の法に對して能信の名を擧ぐと云へり、私に味ふて見れば此正信は他力絶待の信心であるから、大悲救濟の佛智の中心に契當する所で正の名を得た者である、邪は斜めにして中心に叶はずと、傍も亦た正面でない、雜は純正でない、此三つは何れも絶待の法に契當せざる信心なれば一往與へて信の名を附すれ共、尅實すれば法體を見損じたる疑惑の部類に屬して信の名は與へられぬ、然るに一類の徒は彼等を信心と認むる故に、今は正の字を以て簡別したものと味はゝれる、次に今は是れ行に對すとは、正信と念佛と相望めて所行の法たる念佛に對

して能信の信に正の字を冠して他の絶待法を誤認せる邪信傍信雜信でない事を頌したと云ふ意味なのぢや、私は此釋が誠に難有く感ぜられる、後の學者種々に解釋を重ぬれ共此釋の外に出るものはない、其餘は畢竟蛇足ぢや、私共に必要はないと思ふ。

扨、六要主の釋意に據て少しく敷演すれば、此正信は所行の法たる如來至德の名號を他力救濟の體なりと信受したのである、總序に圓融至德の嘉號は轉惡成德の正智なりと嘆じて、之を信知したる所を難信金剛の信樂は除疑獲證の眞理なりと次第して讃述せられた、嘉號が佛智の全體で、その正智の儘を領受したる信心には毫も行者自身の情量を加へず、他力救濟に全托したのであるから、他の邪、雜、傍の信心とは天地懸隔なる所を正信とは名けられた者である、此正信より流出する念佛こそ如來の行を行ずるので、其心情は佛恩感戴、法味愛樂の外はなし、眞に凡小易修の眞教、愚頓易往の捷徑、大聖一代の教この德海に若くもの果して安くに在らんや、宜な

る哉宗祖之を喜んで足らず之を讃揚し、讃揚して足らず今は偈頌を作りて之を詠嘆し玉ふ事。



扨、偈とは梵語で具さには偈陀とも伽陀とも云ふ、曇鸞師釋して偈は句數の義なりと云はれた、支那の詩の樣なもので、長行散文と變りて句數を調へ字數を揃へて諷誦に適する樣に作るが偈頌の趣意である、之に孤起と重頌の二つありて、上の經說を重ねて偈に述ぶるは重頌にして平に述ぶるが孤起である、略鈔の偈は上に列ねたる四法を重ねて偈頌に述べたる故に重頌の方に屬し、此偈は孤起の方と古人も申置かれたことである。

歸二命無量壽如來一、南二無不可思議光一、是より偈の本文に入る、初の句より難中之難無レ過レ斯の句迄は大經の意に依て述べられたる事六要及び大意の釋の通りぢや、此二句は正信念佛に就て所レ信所レ讃の體を標示されたのである、歸命は漢語の南无なり、南无は梵語の歸命にして、無量壽如來不可思議光は阿彌陀佛の名義を二句に分つて敬讃せられたものぢや、

此壽命光明の無量不可思議なる德相は大經十二、十三願成就の文に委曲せり、小經に阿彌陀の名義を說きて光明無量の故に壽命無量の故にと示してある、今も此二句を列ぬる事は南無阿彌陀佛の六字を名義の上で最初に揭げて正信念佛を自信勸化せられたものと味はゝれる、則ち自信に約して讀めば无量壽如來に歸命し不可思議光に南无し奉ると訓じ、化他に約せば奉るを奉つれと訓ずるの意である。

扨、此歸命に就て行者の歸相を認めて淺深を論ずるは邪信、傍信、雜信の部類にして本宗の意に非らず、佛智に歸順して歸相の淺深を顧慮せず、佛力を仰ぎ佛德を戴くが正信の特色である、此義後に至て明かに知るべきぢや、又此歸命に初發と相續との區分がある、初發は自力を捨てゝ佛智に歸する安心の一念にして則ち正信決定の際である、相續は其決定のまゝが憶念相續して佛德を讃仰敬禮する作用を云ふ、左れば今祖師の歸命は相續の方にして憶念敬禮の意なりと知るべし。

抑も龍樹大士の彌陀を禮讃するや、無量光明惠の一句を以て劈頭とし、或は阿彌陀仙兩足尊を以て十二禮讃の首句とせり、世親論主は一心歸二命盡十方無礙光如來と絶叫して願生偈の句頭を起された、今や宗祖は光壽の二德を讃して正信念佛の偈頌を起されたり、壽光の二つは如來攝化の資本である、讃に超世無上に攝取し乃至大悲の本とし玉へりと、本とは根本にして資本の義と味ふて可なり、无量壽でなくては衆生生死の苦果を滅する事が出來ぬ、无量光でなくては衆生生死の因たる无明業を滅する事がならぬ故に此二つを以て十方三世攝化の資本となされたものぢや、此二つは十二、十三の誓願に酬ふて成就し玉ふ所である、然るに光壽无量は一切諸佛皆な同じ、今此二德を讃するは珍らしからぬ事ならずやと云ふに、成る程諸佛みな光壽无量なるは同一なれ共、我彌陀は他力救濟の別願ありて衆生を光壽界に接引するの强緣他に超過し玉ふ故に、此光壽又諸佛不共の光壽なる事論を待たず。此无量壽は他力救濟の无量

壽にして諸佛普通の无量壽に非らず、此不可思議光は念佛衆生攝取不捨の光明にして諸佛普通の不可思議光に非らず、眞に大悲至極の光壽は此如來に並ぶ者はない、是に於てか十方三世の如來の光壽は此如來の光壽海より分出して又此如來の光壽海に歸入する者と云はねばならぬ、大經の華光出佛の相狀、楞伽の皆從无量壽極樂界中出の說等、此事實を證して明白なる者と云ふべきぢや、爾れば我祖師正信念佛を唱へて首に此二句を絕叫し玉ふもの只狹く淨土門中有緣の機に對して唱導し玉ふと思ふ可らず、此光壽如來の前に同等の諸佛なし、此正信念佛の外に同等の佛法なし、諸佛の王は此光壽如來なるが故に、他はみな相待なり、我彌陀獨り絕待なり、此絕待如來の法門たる正信念佛を勸め玉ふ祖師の眼中には復た諸宗ある事なし、何となればこの正信の外に又同等の正信なし、他の所謂ゆる正信は尙相待の域にして邪、雜、傍の名を逃れず、故に至極无上の正信に非らず、此他力の正信獨り絕待にして無上至極の名

を冠すべし、念佛も亦た然り、讃に云はずや念佛成、佛是眞宗、乃至悲願の一乘歸命せよと、私は此讃の意で此劈頭の二句を味ひたいのである。

時に此如來を報身如來と名くるに付て因みに一言せん、報身の目は一家には道綽師が始めにて善導盛に之を主張せられた、道綽師以前には報身の目は未だ行はれてない、法報應三身の說は眞諦三藏譯攝大乘論から盛んになつたものぢや、勿論像法決疑經にも此目は出てある、天台は更に化身を加へて四身として彌陀佛を勝應身と判ぜられた、夫故道綽善導二師力を盡して報身論を主張されたものである、曇鸞師時代には未だ報身の目なき故に論註には實相身爲物身とも、又は法性法身方便法身とも名けて、二法身二にして不離なる事を細かに說明された、是は大論に佛に二身ありと說て、一を法性生身とし二を父母所生身と名けて、卽ち法身應身の二つである、然るに曇鸞師は法性生身の上に消極的方面と積極的方面とを區分して二種法身とせられた者と見へる、由て

實相身卽ち法性法身の方は法身の消極的方面なれば、非〝因非〟果の理體にして心言路絶の一如法界に名けたものである。

扨、次に方便法身の方は法身の積極的方面なれば、亦因亦果の方便莊嚴身にして悲智願行萬德圓備し、有情利濟の大用を施し玉ふ邊に約したものである、而して此二身が二にして分つ可らず、一にして同ず可らざる處を眞實智惠無爲法身と稱して、是が諸佛菩薩の特色なりと云ふが曇鸞師の釋意である、道綽



善導二師に至つては時代流行の三身說を依用し彌陀を報身如來と定められたるが、此報身が卽ち方便法身の代名詞なので、亦因亦果の積極的德用ある邊より報身の名を用ひて四十八願酬因の身と釋せられしは實に難有き事である、讃に無明の大夜を哀れみて乃至影現すると是が酬因身の規格である、爾るに此報身が非〝因非〟果の法性身と不一不異であるから祖師は法性法身に同くして色もなく形ちも在まさずと釋せられた、相卽无相无相卽相なるが報身如來の眞

相なる故に、十劫卽久遠、久遠卽十劫なることも論を待たず、古來十劫久遠の論に力を費すは此報身なる者の分齊を定めず應身に混じて考ふるが故である、然るに此法報二身の尊高廣大なる體相を衆生に紹介するは、應身卽父母所生身の佛である故に、此應身も亦た方便法身に准ずる事勿論なり、讃に云く、無明の大夜を哀れみて至影現する、久遠實成阿彌陀佛至應現する、歴史的眼孔より見れば釋尊有つて彌陀他力救濟の教理此世に顯はると云ふも道理なり、宗教的眼光より見れば久遠實成の彌陀釋尊と現じて實相爲物の大悲を衆生に施すと云ふも非理に非るべし、祖師言く、彌陀如來如より來生して報應化種々の身を現じ玉ふなりと、誠となる哉。

法藏菩薩因位時、在世自在王佛所、是より上に歸命し奉れる方便法身の因行果德の綱要に就て讃嘆するのである、因行に四重ありて此二句が第一重發心値佛の段である、是は經の爾時次有佛より讃佛頌の終りに至る迄の意を頌せられたるならん、法藏菩

薩の因位の時と云ふは、彌陀佛の因位の話に就ては諸經中種々の事迹が散說されてある、(法華の大通智勝佛ノ時の王子等) 故に今は他の時に揀んで大經所ノ說の法藏菩薩たりし因位の時と云ふたものぢや、世自在王佛は經に又世饒王佛ともあり、法藏菩薩の師佛である、經に時有ニ國王一聞ニ佛說法一心懷ニ悅豫一尋發ニ无上正眞ノ道意一等とあるが法藏發ノ心値ノ佛の相狀なのぢや、法藏の二字を吳譯の經には法積(大論)法寶藏(覺經)作法(莊嚴經)法處(如來會)等とあり、何れも大同小異と見て可なり、又名義に附て有財、持業、依主の三釋を設くる等の說もあり。

時に此法藏菩薩は肉身の菩薩なるや法身の菩薩なりやと云ふに、經文の樣子では肉身の菩薩の樣である、國王が佛に値ひて發ノ心出ノ家せられたとあれば、无論肉身の菩薩とせねばならぬが、元來法性の緣起不可思議なれば其邊より味ひ見れば肉身に用事はない、縱し肉身とするも一如法界より示現する所なれば肉身卽法身なり、大寂定中所ノ說の法門たるを合點せば

國王卽法藏、法藏卽彌陀、十劫卽久遠、法性法身方便法身不一不二の作用無レ方難レ思なること信ずれば信ぜられるぢや、疑へば限りもなき事にして懷レ疑輪轉止む時莫るべし、學者須らく己が分を思量して无碍の佛智に歸入すべきである、併し愚は敢て盲從迷信を勸めるのではない、絕待の法門は情識に拘泥しては信ぜらるゝ者に非らず、又常識を抛げて狂信する者の契當する所でも无い、能々虔誠玩味すべきである。

觀二見諸佛淨土一因、國土人天之善惡一、此下は第二に見レ土發レ願の段なり、此二句は經の於レ是世自在王佛卽爲廣說より嚴淨一國土皆悉覩見迄の意を頌したもの、觀見の二字は觀は目で見る方、見は心で見る方にして、二字連ねて眼に見智惠で分別する事である、經の見二老病死一、二觀其面像一、惠眼見レ眞等の文にて觀見の區分を知るべし、諸佛淨土の因とは因の方にして國土人天の善惡は果の方である、經文には諸佛刹土天人の善惡國土の粗妙とあるゆへに、古師（淨影）

は人天善惡を因の方とし、國土粗妙を果の方と解した、經文の上は夫で仔細はない、今祖師は經の意を窄き偈文に述べらるゝ故、因の一字で原因の方を濟せ、人天の善惡を果の方に述べられたものぢや、扨、是土に附て法藏は地上の菩薩なれば自分で自由に見られる筈なるに、何故饒王佛の力を借り玉ふやと云ふに、斯ノ義弘深、非ニ我境界一の言の如く、佛の加被を借る事は他力法門の規則なりと古人(月筌)は解された、尤なる事なり、又此見土は淨土に局るや穢土にも通ずるやの論あり、無論淨穢通觀なる事覺經等の文に見て、又論註選擇の釋分明である、嚴淨國土の經文は選取の邊に約したものぢや。

建ニ立无上殊勝ノ願一、超ニ發希有ノ大弘誓一、此二句は大經の超發无上殊勝の願の文、及び如來會の廣ニ發如是大弘誓願一皆已成就、世間希有の文を取合せて作り玉ふと見ゆ、无上殊勝の願と云ふも希有の大弘誓と云ふも別物ではない、惣じては四十八願、別しては第十八願である、他力一乘の中心を第十八に彰はし、

第十八の細目を餘の四十七に顯はしたるが无上殊勝希有の誓願なのぢや、願とは滿足を志求する義なり、設我得佛とあるが夫ぢや、誓とは自制其心の謂なりと法界次第に見ゆ、心に制限を立てゝ其事の成就を期するので若不爾者不取正覺等とあるが夫ぢや、誓願合して一體なり。

建立に初發と成就の二あり、今は始めて仕立るの意にして成就の方ではない、无上とは加ふる者なきを云ふ。超發とは諸佛に超絶して發起したりとの意味ぢや、殊勝は特絶他を蔽ふの義、希有とは空前絶後の義、（文軏）大弘誓の大は大多義章に云ふ如く大、多、勝、常、深、廣の六義を具すと見るべし、古人云く、契法性發願の故に大なり、緣致滿足无量大願の故に多なり、无上殊勝の故に勝なり、樸公云く、徹窮後際の故に常なり、願力无窮の故に深なり、究竟して靡所聞の故に廣なりと、尤なる解釋である。

扨、誓願とは略せば第十八、一段開けば五願、廣は四

十八なり、實は不可思議の大願なれば一願卽无量願、
无量願卽一願なれば必しも四十八に局らね共、姑ら
く衆生の機根に應じて示されたる者なるべし、異譯
の經に或は二十四願と說き、或は三十六願と說く、
梵本一種ならずと見へたり、一宗正信の四十八を本
として可なり。

五刼思惟之攝受、

此一句は第三に歷刼思惟の段なり、經の具足五刼
思惟攝取莊嚴佛國清淨之行の文意を頌したもの



ぢや、五刼に之を思惟し攝取せりの之の字は上の殊
勝希有なる誓願を承けて之れと云ふたもの、刼とは
刼簸(波)の略にして梵語である、漢語では分別時節と
譯する、刼に大小ある中今は大刼に取る、智論の釋
往生品に經說を引て一比丘あり佛に問ふ、世尊幾許
を刼と名づくるや、佛比丘に告げ玉ふ、我よく說く
と雖汝知る事能はじ、喩を以て解すべし、方百由旬
の城あらんに芥子を溢れ滿てゝ長壽の人が百歲を過
ぎては一の芥子を持去んに、芥子都て盡く共刼は盡

きじ、又方百由旬の石を人ありて百年に一度輕輭なる衣を以て拂はんに、石盡く共劫は猶盡きじとある、是が大劫の量なり、之を五回重ねたるが五劫なり、實に心も辭も斷絶たる無量の時間なるを知るべきぢや、此の如く无量の時間に思惟して我等が爲めに大願を立て玉ふ、實に恐入たる事なり。

思惟とは佛國を莊嚴し衆生を度する事を思量なされた事である、惟は字書に思なり謀なりとある、攝取は攝受の義で如來會の語を採用せられた、選擇も攝



取も言異意同の事は選擇集に見ゆ、略抄の偈には思惟攝取經ニ五劫一とあり、照して味ふべし、

扨、選擇集に諸佛に稱名易行あり法藏之を取玉ふとあり、爾れば何ぞ超世の願と名づくるやとの不審あり、樸公解して法藏の選擇は心中所欲の願なれば諸佛の稱名易行を見て更に自分の他力稱名易行を選擇したるものと云々、勿論の事なり、諸佛のは相對的易行、彌陀のは絶對的易行、夫れで超世願と云はるゝのぢや、

重誓名聲聞二十方一、

四に重發悲誓の段、此一句は三誓偈の第三章の意なり、四十八願の後に重ねて誓ふ故に重誓と名づける、重誓に三章あり、第一は攝法身と攝淨土を該ねた誓である、第二は攝衆生である、普く諸の貧窮を濟はんと誓ふ、其濟ふ方法卽ち品物は何であるか、光明名號が夫である、爾るに光明は義なり名號は體なり、名號でなくては衆生へ屆かぬ、體には必ず義を具するが故に名號を先きにせねばならぬ、乃で第



三章に名聲遠聞を誓ふたのである、報身如來は名號と光明の二つである、古德曰く、光明名號攝二十方一と、故に祖師は此二を父母に譬へられた、此父母に由て无上の信心を生み出すのである、其事は下に至て詳かなり、此の如く相對界の衆生をして絶對に入るの根芽を生ぜしむべき因緣たる名號と光明との二者に於て、名號は殊に肝心であるから祖師は德號の慈父と名づけられた、其德號を十方世界に聞へさせるは十方衆生の信心を產出さん爲なるが故に、之を

重誓するは當然の事と申すべきぢや、扨、斯こ迄に
て如來因功の相狀を讃し了り、之より果德に移るの
である、（此重誓名聲は五願か第十八願なる事、法
體に約すれば十七願重く機受に約すれば十八願重
し）、
普放二無量無邊光一乃至一切一群生蒙二光照一、
是より果德に二段ありて一に光照の利益、二に三願
成就の勝益である、三願を開けば三段になると心得
べきぢや、普放の普の字は十二光を放つ事と塵刹を



照す事との二つを貫いてある、扨、是からは光明名
號信心證果の次第で、果德を頌せられた、善導の光
明名號攝二化十方一但使二信心求念一の釋意と自然に符
合してある樣に味はゝれる、
扨、十二光の義に就ては古今の學者力を盡して解釋
してあれど、今煩雜を恐るるから私の味ふ所丈を述
べて置く、精細なる事は諸書に就て研究せられるが
よい、惣體十二光に於て光明の體になる方と用にな
る方と、又横に約する光りと竪に約する光りと夫々

の持前あれど、夫は名義の彰灼なるに就て一應の解釋なので、實際は體も用も横も竪も相卽融鎔无碍なるが報身如來の光明であるから、十二光の一一に十二の德を具して無盡〳〵なるものと合點すべきぢや、そは和讃を讀みて看よ、第一の无量光を讃するに智慧の光明量りなしと第八の智慧光が冠詞にしてある、又淸淨光明並びなしと第六の淸淨光が第四无對光の冠詞になりてある、是等を以て相卽无碍なるを味はひ知るべきぢや、次に又此十二光は姑らく



相對的に名字を設けて德相を示してあるものゝ、實際は絶對なる事を忘れてはならぬ、報身如來の光明は畢竟何の爲めに成就したるやと云ふに、相對界なる凡夫衆生の惑、業、苦の三を除きて法身、般若、解脫の三德を得しむる所の大慈悲より外はない、之に由て絶對の光明を相對的に方便莊嚴して微塵刹土を照し衆生を煦育し玉ふ、此煦育に由て无明を破り業苦を轉じて大安慰を與へ往生成佛の妙果に至らせるのである、元來が絶對を相對的の名義で案內する

のであるから相對のまゝが其體絶對と云ふ事を承知すべきぢや、

无量光は竪に三世を貫く、又此光りを以て相對的なる有量の諸相をして无量絶對の曉に至らしむる故に眞實明とは名づくるなり、无邊光は横に十方に遍す、又此光りを以て相對的衆生をして有无の二邊を離れて絶對无邊に悟入せしむる故に平等覺と名づくるなり、此二光は體と相とである、爾るに此體相无量无邊なれば體卽无體、相卽无相なるが阿彌陀如



來の體相なりと知るべきぢや、无量光は外、山河、大地、雲霧等にも內の貪瞋、煩惱にも構はらず、利益を施す故に難思議と稱す、佛光中の作用の主なる者なり、天親之を擇んで讃嘆門の標本とし玉ふ、无對光は諸佛中に比對なし、又此光を以て衆生の業繫を除くこと並びなき故に畢竟依と稱す、光炎王は三途の黑暗を啓く、三惡の罪人臨終に光りを感じて善趣に生ずるは此光りの德である、故に大應供と稱す、淸淨光は無貪の善根より生じて衆生の貪欲を治

し業苦を解脱させる故に之を眞光と名づく、清淨は佛道の惣體なり、淨穢不二を悟るが眞清淨なり、歡喜光は無瞋の善根より生じて衆生に歡喜を與ふる故に之を慈光と名づけ又大安慰と稱讃す、智慧光は無痴の善根より生じて衆生の痴暗無明を破し信心の智慧に入らしむ、不斷光は衆生の信心を守護して憶念不斷ならしむ、難思光は具さには難思議光なり、(如來會) 衆生をして難思議の往生を得せしむ、无稱光は如來會に不可稱量光と名づく、成佛するもの无量



无數なれ共彌陀と一體にして別相なきが故に、超日月光とは比喩なり、此界の光明は日月を最とす、故に日月を假りて佛光の超絶を顯はしたもの、和讃に釋迦嘆じて尙ほ盡きず無等々を歸命せよとあり、無等は諸佛なり、諸佛に超絶せる故に无等々と稱讃するなり、此の如く光明を放て普く塵刹を照す事は衆生の信念を開發させて之を攝取せん爲めなりと知るべきぢや、委しき事は和讃六要抄等を能々反復玩味すべし、

一切群生蒙光照とは上の如き佛光の照耀に由りて一切の有情煦育を蒙り遂に佛智に攝せられぬものあることとなしとなり、之に就て疑ひあり、現に地球上の各國中佛教を知らざる國多し、佛教流布せる我國の如きすら不信誹謗の徒少からず、一切群生蒙光照とは全く無實の空言に似たり如何と、此事は古德夙に說明せり、論註に此疑問を釋して譬へば日光遍く照せども盲者は見ず、密雲雨を注げども頑石は潤はざるが如しと云ふてある、此の如く佛光照耀すれ共知らぬは信心の眼未だ開けぬからである、開けず共如來の光明は常に煦育しつゝあるなり、凡そ宇宙間の諸有る道德の教へはみな是れ絕對如來の光明の一端でなき者はない、佛教と云ふ名は附かず共一分たり共人類に正理を知らしめ善道に誘引する所の教あらば夫が悉く如來无量光の活動なのである、然らざれば无量光とは云はれぬ是に由て見れば如來の光明は時に由り機に順ひ千變萬化に活動して常に社會を利濟しつゝあるのである、此の如くして正しく

因緣純熟する時攝取の大益を與へらるゝ事と合點すべきぢや、此點より味へば外道異端なり迚強ちに之を排斥する事は佛教の本意でなき事は明かである、扨、之より次の本願名號に移る事なるが茲に一言すべきは、光明名號不二の義である、元來光明とは何物ぞ、如來の智慧慈悲である、名號とは何物ぞ、又如來の智慧慈悲である、此智慧慈悲の名體と顯はれて感化する方が名號にして義相と顯れて感化する方が光明なのであるから、此二が卽ち不二ぢや、不二の中に體相を分つて光明の煦育に由て衆生の宿善を熟して其處へ名號の體を示して信心の智慧に入らしむるが報身如來の特色である、夫故に今も光明名號次第して如來果德の大作用を讃嘆せらるゝ事と知るべし、

本願名號正定業、至心信樂願爲因、

此二句は十七、八の兩願成就の勝益を讃する者にして、彌陀超世不共の化益は之を其中心とするのであるから要中の要なる處である、之を佛德に約すれば

前の一句は願行圓備せる名體を示して他力救濟の大悲を顯はし、後の一句は无上絶對の信心を勸發して佛因を滿足せしむる姿にして、兩願一體不離にして不共の勝益を施す所を讃したものと味ふべきぢや、又之を修行の法に約すれば前の一句は大行なり、後の一句は大信なり、之を他力眞宗の行信二法とするのぢや、換言せば念佛と正信とである、此二法共に如來の回向法にして行者の自修に非ずと談ずるが他力教の綱格である、之に依て特に行信次第して法門



を建立せり、此正信は何に由て起る、念佛の法に由て起るのである、念佛の法なくては正信の起り樣はない、爾るに此念佛の法如何にして正信を起さしむるぞとならば、此法が卽ち大悲利他の全體なるに由て、宿善の衆生之を聞きて利他の大悲を全領し無上智慧の信心に入る、是れが他力圓頓一乘の約束である、所謂る十七願を以て名號を廻向し、十八願を以て至心信樂して佛因を滿足せしむるの次第と味ふべきぢや、斯く味へば佛德に約するも修行法に約する

も何等の相違はない、爾るに近古以來一宗の學徒くだ〳〵敷之を解して爭論に日月を費し、彌々論じて彌々紛雜を極め殆んど結局を觀ざるの有樣なりしは、一は佛祖の眞意に暗く教旨の所在を認めざるの過ちにして、愚も亦た甚だしき者と云ふべし、其原因は自身出離に掛けて宗教を味はゝず、徒らに凡夫の情識に任せて穿鑿を逞ふするの過ちである、

本願、名號正定、業乃至必至滅度、願成就、

是より果德中の第二段三願成就の勝益を頌する所である、三願を三に開けば三段と成る、元來第十八の一願を開いて五願（十七、十八、十一、十二、十三）と認めて淨土眞宗の行（十七）信（十八）證果（十一）佛身佛土（十二、十三）を發揮する事は祖師已證の法門たる事今更多辯を要せず、爾るに五願中に於て他利に切なるは十七、十八、十一の三願なる故に、今は特に此三願成就の勝益を頌せられたる事と見ゆ、且又第十二の成就は上に光明を頌してあれば已に顯はれてある、壽命は云何と云ふに是又十一の滅度が夫で

あるから、上の光明から引續いて五願成就の姿だと見ても然るべきぢや、先づ一段の大體を箇樣に合點して置て、夫から一句一句に就て反復玩味すべきである、實に此四句は彌陀佛果德の中心にして他力攝化の極要此四句に結歸するものなれば、虔誠眞摯に味ふべき要文なのである、

爾るに古來此一段の偈文を學問的に種々六ケ敷義を附けて反て宗祖大士爲物の眞意を沒了したるの風あり、古語に所謂過ぎたるは尙及ばざるが如しとは



此事なるべし、故に愚は今勉めて彼轍を避け、可成丈け平易に解釋して祖師の悲懷を讃仰したいのである、爾れば本願の名號とは南無阿彌陀佛の六字である、汎く云へば無量壽如來も十二光佛も皆是れ南無阿彌陀佛の異稱にして何れに拘はらぬ事なれ共、他は皆な義別に約しての稱號であるから其意遍ねからぬ邊あり、六字名號は梵語の儘にして都ての意義を含有してある故に、之を根本とすべき事は蓮師の指南もあり、併し十二光の一一に十二を具する如く、

其義を合點の上なれば何れの名にても強ちに不足はないが、先づ大體の据りとして六字名號を根本とすべきぢや、加〻之吾人が稱念するに六字が一番稱へ易い、子供でも眞似し易きは六字である、大悲の本懷は利他に在る事なれば稱へ易くして義の圓滿なる六字を本とすべき事勿論である、

扨、本願と云ふ名は前にも申した通り（无上殊勝願の下）、廣くは四十八、略すれば第十八、中を取りて五願に開きたるが祖師の御意樂なれば、五願を合して十八願と見るが眞宗の据りである、乃で此本願の名號とは十八願の上で申さば無論乃至十念の稱名である、何故に之を十七願に開示せらるゝやと云ふに、是は其本源を知らせる爲である、十七へ開示せねば本源が分らぬ、何とならば乃至十念は何から流れ出るか、上の至心信樂の信心より來るのであろう、其信心は何から生れ來るか諸佛の讃嘆する光明名號から生れ出すのであろう、爾るに光明は德相にして名號は身體なる故に、相を體に攝して誓ふたものが十

七の名號である、此名號を開示せねば乃至十念が何事か分らぬのみならず、至心信樂の生れ樣がない、至心信樂が生れねば乃至十念の流れ出る筈がない、祖師之を遍察して其本源を知ら令めん爲に十七願に開示せられたるは大悲至極の注意である、且又此開示なき時は乃至十念の稱名が諸佛の咨嗟と位を同ふして如來回向の大行たる價値が分らぬ、然る時は不知不識に滅罪生善の邊に泥みて正信念佛の域に入ること難し、爾るに此開示に由りて名號信受の儘が



一形憶念の稱名流出して毫も自身の稱功に用なき事が味はゝるゝ故に此開示の必要なる事勿論である、扨、正定業の名目は善導師に始まる、禮讃に一心專念彌陀名號、至是名正定之業、順彼佛願故とあり、是れ禮拜讀誦等の助業に對して稱名を正定業と名づけられた、今も其名目を襲ふたのである、爾るに單の稱名を以て直に正定業と名づくる事は其意を誤り易き故に、善導は上に一心專念と斷り、下に順彼佛願と限りて信心流出なる事を知らしめ、今偈に

は此句を次の至心信樂願爲〻因と連帶して自力稱名でなき事を知らせてある、乃で古人も正定業の義に就て如來選定の勝業と取る意と、又行者を正定聚に入らしむるの業と云ふ意と二重に味ふてある、前は能稱に約して解し、後は名體に約して解したもので、能稱に約する邊では此稱名は如來選擇の大行なれば、行者が稱功を見るべき行ではないぞと云ふ事を知らしめ、名體に約する邊では他力法體の儘が萬行圓備であるから一念信受の立處に法體の大行が行



者の行と成りて往生の大事を滿足し了るとの意である、眞實信心必具二名號一の釋に意合して難有い事である、又云く、外を主として信心を牽く所で名號を正業と名け、內を主として行者を引く所で信心を因と名づく、且らく機法の區分である、爾るに正業信因並に佛德なれば機法卽不二にして業因も亦た全く一なるのみと、私は此釋を難有く存ずる事である、外を主として信心を引くとは德號の慈父が能生の因として信心を喚起するを云ひ、內を主として行業を

引くとは歸命の信心が內因として如來の回向を感ずるなるを云ふなり、

至心信樂願爲〻因とは上の本願名號を聞いて他力救濟の佛智を領する一心が佛因ぞとの意である、銘文に此句を擧げて彌陀如來回向の眞實信心を阿耨菩提の因とすべしとなりと自釋せられた、大體は是で明かなり、此一句は第十八願の勝益を頌せられたのである、五願開示の法門に於て第十八の持前は他力の大信である、大行を回向するが第十七であるから彼を往相回向の願と名け、大信を回施するが第十八であるから是を至心信樂の願と名づけられた、之に附て不審あり、住相回向の願と云へば行信共に籠りてある、爾るに又更に往相信心の願あるは煩重ならずやと云ふ事なり、玆に深妙の義理がある、其譯は十七願の名號は正覺の全體なれば體德の上に於ては信行共に籠る事勿論なり、爾るに相對界の衆生が絕對法を相對的に誤信する癖ありて佛智を全領し佛德に滿足する事難き故に、如來の大悲之を鑑みて特に信

心回施の大願を設け玉ふ、此願ありて衆生始めて如實に體德を全領し、大悲の攝化茲に滿足する事を得玉ふ、此の如く十七は法體回施の願なる故に體德の上では信行共に籠りてある事なれば之を往相回向の願と名づけねばならぬ、而して十八は其回向の體德を全領する仕樣を授けらるゝのであるから之を往相信心の願と名づけねばならぬ、何となれば本願の名號は如來選擇の妙行なれ共衆生が如實に信受せぬ時は相對的雜行雜修の分齋となりて絶對的正定業の價



値を全くせず、如來夙に之を鑑み玉ふ故に至心信樂の別願を建てゝ衆生を佛智に入らしめ玉ふ、豈要中の要なるものに非ずや、此要中の要たる旨を了せ令んが爲めに五願に開示して、大行大信兩願連帶し、法體と機受とが一體不離にして共に佛智の施設たる事を示すが祖師の悲懷なり、其上に又光明、名號、信心の三つに就て懇ろに兩重の釋義を垂示し、法體の名號が初重に於ては最初信心を惹起せしむる時には光明所生の緣に對して能生の因の位に居し、次

に報土得生の果に向ふ時には信心の内因に對して光明と共に外緣の地位に在る事を知らせられたのである、然れば行者の稱名は何の位なるやと云ふに、至心信樂の上の稱名は法體の儘が流出する者なれば无論一聲々々が无上功德の發現である、安心未定の時の稱名は體德の邊より申さば所聞の名體なれ共修相の邊より申さば雜行雜修なれば十九、二十の位の名號にして十七願の大行ではない、譬へば日輪は同一なるも明眼の見ると眼病人の見ると見る者の邊より申さば日輪に明暗の別あるが如きである、此喩を以て合點すべし、

兎角此行信の甚深なる義趣は自身の安心に掛けて領受玩味せねば理屈穿鑿では佛祖の正義に契當する事は到底叶ひ難し、古來宗乘を學ぶ者が行信に頭を痛すと云ふは畢竟自身の安心に掛けて无碍の佛智を仰信せぬが故である、佛智を信受の上より味ひ來らば行信の法門祖釋の深旨之より尊とく有難い事はないのである、

扨、至心信樂の字訓等は信卷を篤と拜見すべし、三信共に如來の回向にして卽ち他力の一心なること祖釋赫々として日月よりも明かである、終りに至心信樂願爲ㇾ因とは平易に申さば至心信樂の願より與へ玉ふ信心を因とすとの意である、

成二等覺一證二大涅槃一、必至滅度願成就、

此二句は第十一願成就の勝益を頌したのぢや、第十八願の眞實信心に由て現當の利益を得る事は第十一願成就の効力なるぞとの意である、銘文に此句を釋して成等覺と云ふは正定聚の位なり、此位を龍樹菩薩は卽時入必定との玉へり、曇鸞和尙は入正定之聚と敎へ玉へり、是れ卽ち彌勒の位と齊しとなり、證大涅槃と申すは必至滅度の願成就の故に必ず大般涅槃を證ると知るべしと云ふてある、此祖釋で大體を心得るが宜しい、等正覺の名は如來會の十一願文に決定して等正覺を成じ大涅槃を證せずんば菩提を取らじとある、其等正覺を正定聚と同じ意として依用せられたのである、六要師は如來會の決定の二字を

正定聚に取り等正覺を滅度の義と釋せられた、是は經文の顯意で釋した者で祖師は經の密意に由て等正覺を涅槃の分位とし、滅度を滿位と見て釋せられたのである、一宗の意では他力大信の結果に近遠の義ありて現生と當來とに次第す、等正覺は補處の位に約して現生の冥益とし、證大涅槃は究竟位として當來の顯益とする、等覺とは妙覺に對すればまだ一等の无明がある故に、若し菩薩に對すれば等覺佛と名くれ共、佛に對すれば无垢地の菩薩と名ける、今具縛の凡夫を此位に齊ふする事は此一生を盡して大涅槃に入る事が彌勒に同じき故に、此道理を以て比例したのである、祖師曰く、眞知彌勒大士至故曰二便同一也と、爾るに經文に國中人天不下住二定聚一必至中滅度上者とある故に學者之に泥んで我宗の現生正定聚を非難すれ共、夫は他力頓教の極意に達せぬからである、大經の卽得往生を龍樹は卽時入必定と判せられた、大論に卽時有二二種一、一者同時二者雖レ久更無二異法一、乃至若聞二佛名一卽時得レ道、譬如下鬼神着レ人聞二仙人呪

名一卽捨去上とある、卽時入必定が夫である、祖師現生十益の釋を玩味して看よ、信心の行者淨土の菩薩と同等の義は精確なる事である、善導言く、厭則娑婆永捨、欣則淨土常居と、祖師此意を承けて有漏の穢身は變らねど丶云々、御消息に云く、如來の誓願を信ずる心の定まると申すは攝取不捨の利益に與る故に不退の位に定ると御心得候べし、眞實信心の定ると申すも金剛の信心の定ると申すも攝取不捨の故に申すなり、去ればこそ无上覺に至るべき心の定る



と申すなり等と、但し我宗に不退の位と云ふは他宗の所談とは異なり、現益の邊では心不退である、當益の邊では處不退である、此の處不退位も他師の解釋とは同じからず、所謂大願清淨ノ報土不レ云二品位階次一速疾超二證无上涅槃一に名づけたものぢや、故に處不退卽大涅槃なのぢや、滅度とは涅槃の舊譯にして分段變易二種の生死を滅して欲、見、有、痴の四流を超度するの義ぢや、涅槃とは唐譯二圓寂一、四德已備を圓と言ひ、二障已亡を寂と曰ふ、今二乘の

小果に揀んで大の字を冠したものである、以上果德を明かし了る、

如來所三以興二出世一、唯說二彌陀ノ本願海一、

上に所讃の體德を頌し了りて是より能讃の師承を頌するので、初に釋尊の勸讃を頌し、二に七祖の相承であるが、今は釋尊の段である、此二句は釋迦出世の本懷に就て讃述したのである、銘文に如來所三以興二出世一と云ふは諸佛の世に出で玉ふゆへと申すなり、唯說二彌陀ノ本願海一と云ふは諸佛の世に出で玉ふ御本懷は偏へに願海一乘の法を說んとなり、然れば大經には如來所三以興二出於世一欲下拯二群萌一惠以中眞實之利上と說き玉へりとある、是にて大體を味ふべきぢや、



扨、出世ノ本懷に附て古來諍論の尤も盛なのは法華との討論なりしが、此事は覺如師の出世元意、存覺師の法華問答等に詳かなり、法華にも出世本懷の文あり、大經にも其文ありて、文の爭ひは牛角であるから、彼を自力敎の出世本懷とし、此を他力敎の出

世本懷として、時機相應の點に就て法華は縱に大經に讓ると云ふが古來の定說となりてある、是は動かぬ所であろう、然るに佛法は元より一法窮盡の法理であるから、何れの法門にても機緣に相應すれば其所入の法を以て出世本懷とするは當然の事である、佛智に二つなき故に入り了れば所證の理は同一である、只所入の門が差別する丈の事ぢや、由て眞言有緣の機の爲には大日經が出世本懷である禪宗有緣の機に取ては文字に依らず以心傳心が出世の本懷である、何れにても轉迷開悟の結果を滿足したる法が其機に取ての出世本懷の敎たるは爭はれぬ所とせねばならぬ、經文の上に出世本懷と云ふ事が有らうが無からうが左樣な事は頓着に及ばぬ、事實を證とすべきぢや、然るに今我等は他力敎有緣の機なるが故に、我等に取ては何處迄も唯說彌陀本願海の經釋を有難く信奉すべきである、然れ共我有緣の敎のみ眞實にして他は無利益なりと云ふが如きは謗法の大罪として深く愼み恐れねばならぬ、本願海とは佛願の深

廣に喩へたもの、涅槃經に海の八德を說けり、一、漸々轉深、二、深難得底、三、同一鹽味、四、漸不過限、五、有種々寶藏、六、大身衆生所居、七、不宿死屍、八、萬流大雨不增不減等なり、

五濁惡時群生海、應信如來如實言、

此二句は上を承けて五濁惡世の衆生に此如來興世の本意として說き示し玉へる實語を信受せよと勸發する意にして、如來會の應信我敎如實言の佛語に據りて我敎の二字を如來と換られたものである、大經では是故我法至如法修行の文に當り、小經にも汝等皆當信受我語とありて何れも附屬流通の文である、

五濁の名は小經にあり、勸說に至相の解を引きて濁とは不淸の義なり、人壽百歲以下を命濁とす、尊卑を識らず上を敬し下に接せぬが衆生濁である、非法の貪欲を增長して凶器を用ひたり諍訟鬪亂諂誓妄語したり邪法を尊んだりするが煩惱濁ぢや、扨、邪見が追々起りて正法を破滅し邪法が段々增長するが見

濁である、飢渇とか疾病戰爭等の絶へぬが刧濁である、今日の社會と照し見よ、一一符合してある、具さには瑜伽倶舍又は法華小經の諸註を見るべし、惡時は其五濁の增盛な時に名づけたもの、群生海とは入法界品の語と云ふ事ぢや、生死無邊なるを海に喩へたものである、如實言とは天臺金剛の疏に如來是眞語者、實語者、如語者とあるを解して實是無虛、如必當理、寶積經第一百曰、假使界壞日月落地、滿虛空無所居、水性可使變爲火、火性亦可變爲水、大海盡可令枯渴、如來實語終不二、大本說、惠以眞實、小本說誠實言是也、

能發一念喜愛心、不斷煩惱得涅槃、

以下は二に信敎の得益を頌するに五段ある中、初に能發の勝益を頌する段である、銘文に能發一念喜愛心と云ふは一念慶喜の心眞實信より發すれば必ず本願の實報土に生ると知るべし、不斷煩惱得涅槃と云ふは煩惱具足せる我等无上大涅槃に至るなりと知るべしと自釋せられた、又大意には能發

一念喜愛心と云ふは一念歡喜の信心の事なり、不斷煩惱得涅槃と云ふは願力の不思議なるが故に我身には煩惱を斷ぜざれ共佛の方よりは遂に涅槃に至るべき分に定るものなりと釋してある、大體は此の如く味ふべきぢや、私に案ずるに此の下の四句は大經では本願成就の文の意を頌せられたものと見ゆる、爾るに文相は如來會と論註とに據て出來てある、初の一句は如來會に依り、餘の三句は論註から來たのである、能發一念喜愛心は如來會の流通文



に若有聞彼佛能生一念喜愛之心當獲如上所說功德とある、此二句目を取りて生の字を發と改ため之の字を省いて七字の句とせられたものぢや、扨、能發とは衆生の方に一念の信心を發起するには餘程力らの入る樣に思はれるが全く然にあらず、信樂を獲得するは如來選擇の願心より發起すとありて、行者の能發は如來の所發であるから、衆生の方に力らを用るのではない、二尊の殷重なる召換と發遣とに催されて纔かに一念信受する斗りでと云ふ意

味である、喜愛とは歡喜愛樂の略にして、歡喜は往生に就き愛樂は佛の功德に就て起る心相なり、是れ則ち佛智より發起せられたる他力の大信心なりと知るべし、

不レ斷二煩惱一得二涅槃一の句は論註より來る、註の下卷に有二凡夫人煩惱成就一亦得レ生二彼淨土一、三界繫業畢竟不レ牽則是不レ斷二煩惱一得二涅槃分一とあり、曇鸞師は維摩經方便品の不レ斷二煩惱一而入二涅槃一の語を淨土の莊嚴功德へ轉證されたのである、時に此句を銘文では煩惱具足せる我等无上大涅槃に至るなりと知るべしと當來の證果の上で釋せられ、大意では願力の不思議なるが故に我身には煩惱を斷ぜざれ共、佛の方よりは遂に涅槃に至るべき分に定まるものなりと現生の正定聚の上で釋してある、活佛教の妙味は斯ふしたものぢや、爾れば此一句の當分は當益を頌するなれ共密には不退の現益をも意味する事知るべし、尙此句の現益の意味を敷演したるが攝取以下の八句なりと知るべし、因に論註には涅槃分とあるを今偈

には分の字を省きたるは如何と云ふに、彼は二十九種の廣門に約して示し、今偈は一法句の略門に約して頌せられた者と知るべし、讃に本願圓頓一乘は逆惡攝すと信知して煩惱菩提體無二と速にとく證らしむとあるが今偈の意である、元來廣略相入の妙果なれば、分と云ふも滿と云ふも二而不二なるが眞實報土の證りと知るべきぢや、又現益の意に取れば涅槃分は正定聚の事である、蓮如師の一念歸命の時正定聚に住す是れ不退の密約なり、これ涅槃分なる由



仰られ候とあるが夫ぢや、

凡聖逆謗齊廻入、如二衆水入一海一味一、

これは二に衆機齊入の段にして、萬種の機類が上の一念の得益に於て等差なき所を頌したのである、銘文に小聖、凡夫、五逆、謗法、無戒、闡提みな廻心して眞實信心海に歸入しぬれば衆水の海に入て一つ味ひとなるが如しとなりと自釋せられ、又大意には凡夫も聖人も五逆も謗法もひとしく本願の大智海に廻入すれば諸の水の海に入て一味なるが如しと云へ

る意なりと釋してある、是又祖師は海を信心の事とし、蓮如師は本願の事として解せられた、信卷の上に凡按二大信海一者、不レ簡二貴賤緇素一、不レ謂二男女老少一、不レ問二造罪多少一、不レ論二修行久近一、非レ行非レ善、非レ頓非レ漸、非レ定非レ散、非二正觀一非二邪觀一、非二有念一非二無念一、非二尋常一非二臨終一、非二多念一非二一念一、唯是不可思議不可稱不可說信樂也、喩如二阿迦陀藥能滅一一切毒一、如來誓願藥能滅二智愚毒一也とあるが銘文の意である、又行卷に言レ海者從二久遠一已來、轉二凡聖所レ修雜修雜善川水一、轉二逆謗闡提恒沙無明海水一、成二本願大悲智慧眞實恒沙萬德大寶海水一、喩二之如一レ海也とあるが大意の釋の意味である、

偖て凡聖逆謗の名義に就て、凡は凡夫の事なるが梵語では婆羅必栗託仡那と云ふ、婆羅を愚と譯し、必栗託を異と反し、仡那を生と反す、愚異生と云ふが正當である、愚痴暗冥无レ有二智慧一、但起二我見一不レ生二无漏一故、乃至亦名二嬰愚凡夫一是は義譯なりと（玄應音義）、寶積經頌に諸愚痴凡夫、常顧二於身命一、不レ

願求菩提、起雜染三業、常爲利自身、及妻子眷屬、空視於無我、是名痴凡夫、聖は梵語阿梨耶譯出苦者、亦言聖者、(玄應)唯識疏曰、聖者正也與理相應於事無擁目之爲聖、又契理通神目之爲聖、正也者是約所證、謂其理眞正故會之爲聖、大乘義章曰、正謂理也理无偏邪故說爲正、若依假釋、白虎通曰、聖者通也等、逆は五逆なり、五逆に三乘大乘の別あり、如信卷末、謗法は如論註末、齊廻入とは齊等廻心歸入證入なり、齊等とは六要五卷、五乘齊入を釋するに齊上齊下の義を示してある、齊下と云ふは彌陀の本願は劣機を目的とし玉ふ故に、三乘の賢聖でも凡夫に同じて往生を願ふ所が齊しく廻心歸入する相たである、齊上とは諸佛の報土は地上の菩薩で无くては往生は叶はぬ、爾るに今眞實報土へ凡夫が生ずる事は願力不思議を以て凡夫を大菩薩に等しからしむると云ふものなり、故に齊しく无上佛果に證入するぞと讃せられた、祖師は廻入を大信海に入る事とし、蓮如師は智願海に入

る事と釋せられた、彌陀の智願海水に乃至煩惱菩提一味なり、



扨、如衆水入海一味の句は論註大義門功德の文に、願往生者本則三々之品今無一二之殊、亦如淄澠一味焉可思議の文に據つたもの、衆水は凡聖逆謗の喩へ、海は報土に喩へたり、六要には論註性功德の又言性是必然義、不改義、如海性一味、衆流入者必爲一味、海味不隨彼改也の文を引て釋された、何れも安樂淨土の平等の證果を顯はしたる釋である、

攝取心光常攝護等

以下八句は正しく信心の現益を頌したもので、前に云へる如く不斷煩惱得涅槃の句に於ける現生密益の意を敷演せられたのである、銘文の自釋に攝取心光常攝護と云ふは无碍光佛の心光常に照し護り玉ふ故に、无明の闇はれ生死の長き夜已に曉になりぬと知るべし、已能雖破无明闇と云ふは此意なり、信心を得れば曉になりぬと知るべしとあり、亦一句

の據る所は觀念法門の但有下專二念阿彌陀佛一衆生上、彼佛心光常照二是人一照護不レ捨の文なりと古來の釋である、併し攝取の源は觀經の念佛衆生攝取の文なる事爭ふ可らず、之に就て法霖能化の說に、大經の卽得往生は心攝取なり、觀經の攝取不捨は相攝取なりと云はれたる由、有難き解釋である、又攝取の字義に就て攝は散りてある物を搔き納める事、取は受取て離さぬ事と云ふ(五部評)てある、一念喜愛の信心が无碍の佛智を感じて佛心中に歸入したのであるから佛心中に攝め取りて放ち玉はぬ故にあと戻りせぬ事になりたるが常照護の相である、常は相續不斷を顯はしたものなり、時に此攝取心光とは十二光の中何れなりやと云ふに、一多證文に佛心光とは無碍光佛の御こゝろと申ずなり、乃至かの佛心に常に護り玉へる彌陀佛をば不斷光佛と申すなり、乃至不捨と云ふは信心の人を智慧光佛の御心に攝め護りて心光の中に時として捨玉はずと知らしめんと申す御のりなりとある、爾れば正しき攝取は无碍光智慧光の作用に

して其後常に護るは不斷光の力と知るべきぢや、
已能雖レ破二无明一、闇とは心光常護の故に已に能く无明の闇は破られたれ共と云ふ意なり、雖の字は次の二句の前置詞である、世俗にけれ共と云ふ詞の次には必らず殘る詞があるなり、扨、无明の闇とは无明の扱に就て起信論の解し方に淨影賢首元曉等種々の相違ある事五部評に委曲出てある、彼書を見るべし、勦說に无明の體を推究すれば本末麁細あれ共實は痴なりと起信論の不レ達二一法界一の文を引てある、彼論に无明の體を明して一法界に達せぬ故に心相應せず忽然と念起るを無明と名づけると云ふ、一法界と云ふは眞如平等の事で、換言せば絶對界の事である、相對界に迷へる衆生が絶對界中に居り乍ら法界平等の眞理に達せぬ故に不覺に差別の念を起すが无明の相たるぞと云ふてある、衆生有碍の智慧で无碍の佛智に相應せぬが卽ち无明の痴闇である、痴闇故に佛智を隔て種々に疑惑して久敷生死に流轉せり、爾るに光明名號の催しに由て佛智を信受し往生を決

定す、是れ痴闇が破れたのである、破闇と攝取とは勿論同時なり、扨、此の如く无明破れて佛光に照護せらると雖と次を起すが此一句の意である、

貪愛瞋憎之雲霧、常覆二眞實信心一天一とは上の雖の詞に殘された事件である、銘文に此二句を釋して我等が貪愛瞋憎を雲霧に喩へたり、貪愛の雲、瞋憎の霧、常に信心の天を覆へるなりと知るべしとあり、是が不斷煩惱の眞相である、此二句は善導師二河の譬喩を改作せられたのである、二河の譬も結構なれど平生業成の宗意を體認するには此改作が實に有難い事である、何れ活佛の所作は斯ふしたものである、貪瞋の事は勦說に唯識論が引てある、云何爲レ貪於二有々具一染著爲レ性能障二无貪一生レ苦爲レ業謂下由二愛力一取蘊生上、又云何爲レ瞋於二苦々具一憎恚爲レ性能障二无瞋一不レ安惡行所レ依爲レ業、謂下瞋必令二其心熱惱一起二諸惡業不善一性上故と、有とは三有の果である、三有は生有、死有、中有なり、有具とは有が爲の道具の事、此器界は有が爲の道具なり、有の正報が有具の依報に

染着して離れぬを生とす、是が貪の自體なり、之にて无貪を障へ苦を生じて業を爲すを取蘊生と云ふ、有漏の五蘊を生ずるなり、瞋は憎恚を性とす、瞋は違境に起り、貪は順境に起る、今覆蔭の義から喩へたもの(涇)、

眞實信心とは要解に眞實の佛願を信ずる心なるが故に、凡夫生得の眞實底に佛願の不思議を信ずる心なる故に、佛體の眞實に依て衆生の信心を起すが故に等の三義あり、此三義一にして他力の信心なりと樸



師は云へり、天とは清淨の義、眞實の義等の解あり、私見では貪瞋を雲霧に喩へたる故、信心の上を蔽ふ所を天と云ふたものである、无論信心は普通でも澄清を性とすれば、況して佛智廻施の信心なれば清淨なる事云ふに及ばず、雲霧なければ天空　淨なるが如く、貪瞋なければ佛智の宿れる吾人の心は內外共に清淨なるべきも、今は貪瞋の爲に內外清淨とは行かぬ所を雲霧の天を覆ふに喩へたものと味はゝれる、

譬如日光等と、此二句は煩惱の中にも淸淨の信心は變らぬ所を譬喩にて讃嘆せられたものである、佛智を明信したる信心は卽ち佛智其儘なる故に之を日光に譬へ玉ふ、銘文に日月の雲霧に覆はるれ共闇晴れて雲霧の下明きが如く、貪愛瞋憎の雲霧に信心は覆はるれ共、往生に障りあるべからずとなりと釋せられた、之に就て雲霧之下とある下の字の意を勦說には底の義に取り、文軌蹄涔には下の義に取つてある、樸公は之に左袒し、嵒公は勦說を遵奉して互に辯を盡された事なるが、是は何れでも味ひのある事である、畢竟信心が煩惱の儘に明かなと云ふ邊と、煩惱の底で輝いて居ると見るの區別なので、文軌は雨天に喩へて、曇天でも夜と違ふて流石日の出でたる徵しには雲霧の下でも道を踏み迷はぬと、信心の行者貪瞋に覆はれても、心光攝護の效しには往生の道には迷はぬと云ふ樣に味はひ、筌嵒二公は貪瞋の起る底にも往生一定の喜びは變らぬと云ふ邊に取つたので、一は煩惱の儘が信德で明かるいと味ひ、一は煩

惱の下底に信德は輝いて居ると味ふたので、何れも難有い事である、何分佛祖の言と云ふ者は、一言一句にも多くの趣味を含有してあるが常であるから、私は兩說共に籠るものと味ひたいのである、煩惱の儘が信德で明かるいと云へば、腹立てつゝ欲起しつつ御慈悲に慰められると云ふ味なり、煩惱の下底に信心は輝いて居ると云へば、腹立つても欲起しても後から慚愧して御慈悲に立戻ると云ふ味なり、

獲信見敬大慶喜、卽横超絕五惡趣、此二句は上の雲霧之下明無闇につけて更に信心の得益を讃嘆したものなり、上の句ば大經三十頌の聞法能不忘、見敬得大慶の二句を以て七字の句とし、下の句は同經の必得超絕去、乃至自然閉の文に據る、銘文に上の句を釋して信心を得て大に慶び敬ふ人と云ふなりとあり、又下の句を釋して大信心を獲れば卽ち横に五惡趣をきるなりと知るべしとなり、横超と云ふは如來の願力他力を申すなり、超は生死の大海を易く超て无上大涅槃の都に入るなりと、信心を淨土宗の正

意と知るなり等とあり、大體は此の如し、

扨、經に聞法能不忘とある五字を獲信の二字に改められたる事誠に難有き事なり、法を聞て能く忘れずとあるが信心を得たる相たなり、佛智の信を得ねば憶持不忘と云ふ事は出來ぬ、夫で今は獲信の二字に彼五字を收められた、聞は信心を顯はすみのりなり、信心を得れば憶念の心常にして忘れぬ故に、之を獲信と改められたるは難有き作文である、

時に此句と能發一念の句と同義に非ずやと云ふに、

彼れは信心の當體なり、是は其得益を示し、兼て下の横截の下地になると文軌の釋を引て五部評に注意してある、尤なる事なり、見敬とは古來眼見に取ると心見に取るとの二釋がある、(淨影は眼見)(義寂は心見)、一念の上で云へば心見である、卽ち佛智を見る事なり、聞見一致の故に聞其名號が无碍光如來を見るのである、又相續の邊では眼見なり、繪像木像を見ても信心の上より拜見するは未信の時とは大きに格別なり、未信の時は尊重恭敬の念も少なけれ

共、獲信の上は恭敬の思ひ前日と異なる事勿論である、聖教を披見するも亦た然りぢや、樸公信卷に引用せられたる華嚴經の信无垢濁心清淨、滅除驕慢恭敬本の文を引證して信が恭敬の本たる事を云々せり、難有き說明である、



卽橫超絕五惡趣とは他力頓極の益を示したものなり、卽は卽時なり、證文に時を經ず日をも隔てぬなりと釋してある、橫超截とは銘文に橫はよこさまと云ふは如來の願力を信ずる故に行者の計ひにあらず、五惡趣を自然にたちすて四生をはなるゝを橫と云ふ、他力と申すなり、之を橫超と云ふなりとある、截の字は說文に斷也とありて、斷も截も共に切除けるの義なり、大經に橫截五惡趣の次に惡趣自然閉とあり、願力に截のけらるゝ故に、行者の方は其儘にて惡趣自然閉なり、難有き事ならずや、五惡趣とは五道である、人間天上は五道中では善趣なれ共、淨土に對する時は惡趣である、樸公の釋に難有い事が云ふてある、夫は經に橫截五惡趣との玉ふは果にての玉

ふ、今は因にての玉ふ、因は截れても果は殘る、吾人は五惡趣中の人間なり、此果は淨土できる、變成男子も淨土にての事なり、例せば小乘の薩婆多部に云ふ通り、阿羅漢の有餘涅槃は三界を斷盡すれ共、矢張り三界中に在るを云ふ、此身が死んで仕舞た所を無餘と云ふ、羅漢が死んで始めて涅槃を得ると云ふではない、平生に羅漢なれ共、過去の業力に依て命のある間は人間なり、形に附た事之を有餘涅槃と云ひ、人身を捨てゝ沈空に入るを无餘涅槃と云ふが如く、獲信の當體に五惡趣をきるは有餘涅槃の如く、形を捨てぬ間は娑婆の人なり、淨土へ往生すれば无餘涅槃の如し、宗祖の竪超竪出等の釋甚深なる事二卷抄を學ぶべしと、斯樣に味ふてこそ眞宗の法義も尊とけれ、凡夫の半面計りで正定聚の半面を忘れては彌陀法の價値は更に無いのである、

一切善惡凡夫人乃至分陀利華、

上來信心の行者現生の利益に就て頌し來りしが、最後に諸佛稱讃を以て一段を結ぶが此四句である、初

の三句は如來會の意に據たもの、彼經に若善男子善女人等於二彼法中一廣大勝二解之一者當三能聽聞獲二大歡喜一とあるを、今は善男善女を善惡凡夫と替られたるは玄義序題の文字を象どり、彼法中とあるを如來弘誓願と改め、聽聞獲大歡喜とあるを聞信の二字につゞめ、廣大勝解者を後に廻された者である、廣大勝解とは佛智に契當して決定する所を稱讃したのである、勝解は最勝なる解了と云ふ事、唯識論に勝解の心所は決定の境に於て印持するを性とし、引轉すべからざるを業とすとありて、決定の所でなくては起らぬ心所である、今廣大の二字を冠したるは普通の勝解でなき事を顯はした者で、廣大は絶對である、絶對の勝解は佛智より外になし、卽ち光明の緣に由て名號の因を聞信したるは、全く佛智に催ふされて佛因を領受したのであるから、之を廣大勝解と稱讃せらるゝのである、樸公曰く、今日の吾人は但念二姪佚一、煩滿二胸中一、愛欲交亂、坐起不レ安の凡夫、中々廣大勝解者と云はるゝ身にも心にもあらね共、宗祖は一

念の信を廣大勝解の一心との玉ひて、凡夫の尼女房の淺間敷ものを聞信如來弘誓願の處にて、佛の方より見玉へば煩惱卽菩提、生死卽涅槃にて廣大勝解者なり、佛界より見れば今日の吾人は人界とは雖も心は地獄界なり、其地獄界より佛果迄は中間に九界あり、其中に分段變易の生死あるをば、一念の信心にて悲願の心行得しむれば生死卽ち涅槃なり、生死の大海が卽涅槃の薩婆若海となるなり、貪が起れば稱名、惜が來れば念佛、貪瞋痴の三毒が卽三德秘密藏



となる、我說卽是空、亦是中道義、亦名爲假名に
て因緣所生法を離れず、卽假卽空卽中と佛の方より
は見ゆるなり、然れ共凡夫の機の方にては何れ迄も
此儘の惡人なり、法の其德より眺れば廣大勝解の人
とも、人中の分陀利とも喩ふるなりと、あゝ廣大勝
解者でなくてはかゝる妙味は吐れぬなり、可尊可仰、
是人名分陀利華の一句は觀經より來る、分陀利は
此に白蓮華と反す、觀經疏に若能相續念佛者、此
人甚爲希有、更無物可以方之、故引分陀利

爲レ喩、言二分陀利一者、名二人中ノ好華一、亦名二希有華一、亦名二人中ノ上々華一、亦名二人中ノ妙好華一、此華相傳名二蔡華一是也と云ふてある、此華の事は諸宗でも喧ましい事で、法華文句記や大日經疏にも段々釋してあるが、夫等は略して今善導の釋に由れば、つまり殊勝希有なる義で、佛が此華に御喩へになつた事は明かである、好華、希有華、上々華等とあるが夫である、然るに此華相傳へて蔡華と名くとあるは、支那人の古來相傳へて貴ぶ事を擧げられた者と見へる、蔡は國名で、此蔡の國には千年を經た靈龜があつて、其甲をトひに用ひたので龜の事を蔡と名づけた事である、史記の龜策傳に龜千歳にして乃ち遊二蓮華之上一とあるので、靈龜の遊ぶ華と云ふ所より蓮蓮を蔡華と名けたのである、併し此時は別に白蓮華と云ふ事では无いが、何分左樣の事から支那でも蓮華を貴ぶ故に、大師が例證に引かれた者と見へる、兎角世に珍ら敷、尊とき華と云ふ義から佛が念佛者を譽めて御喩に成つたと合點すべきぢや、大日經疏には昔し瑠璃

王が釋女を害せし時、大迦葉が阿耨達地で此華を取て、八功德水を裹んで灑いだれば、諸女は身心安樂を得て命終して生天した、因レ是投二華於地一、遂成レ柱、至レ今猶有也、華ノ徑一尺餘、是可愛也とある、是が天竺に於て貴重せらるゝ因緣と見へる、兎角蓮は白蓮で无く共佛經には處々に引用されてある、維摩にも高原陸地不レ生二蓮華一、卑濕汚泥生二蓮華一と說て、二乘の沈空の證よりも凡夫の煩惱の心中に信心の華の開く事を釋せられた、今は白蓮華の最勝希有なる所を以て法德に喩へ玉ふと知るべきぢや、

彌陀佛本願ノ念佛、邪見驕慢ノ惡衆生至無レ過レ此、

此四句は初の一句は念佛なり、次の四字は正信なり、經の流通文の深意を發揮して、非器の勝法を信受する事難きを知らしめて反對の點より之を勸め、上を結び下を起すの偈文である、

彌陀佛本願ノ念佛とは經の若聞斯經とある斯經の二字を言を改めて表章せられたので、斯經は選擇本願たる念佛の法を擧げて斯經の二字に替へられたので

ある、特に彌陀佛の三字を冠する事は刊定記に云ふ如く、本願念佛の名は諸佛にもあり、藥師瑠璃光本願功德經抔にも名號を本願とする事が說てある、夫故諸佛に簡んで彌陀佛の三字を冠した事と知るべし、邪見驕慢惡衆生とは三十頌の驕慢、弊、懈怠、難以信此法と、如來會の懈怠、邪見、下劣人、不信如來此正法と兩經の句を取合して造語せられた事諸註に見へたり、大經流通文では只若聞此經、信樂受持、難中之難等と說て、一般に値佛聞法修行の難き事から此經を聞信するの殊に難き事を示されたるを、祖師は此流通文と三十頌の文とを一組に取合して佛說の深意を發揮せられたるは誠に難有き事である、何とならば先づ此法の難値きは无論なるに、値ても信ぜねば不値が如くである、信ぜぬは何故ぞとならば、邪見驕慢の爲めに无眼人无耳人の如くなる故である、難値の法に値ひ乍ら信受せぬとは是れ程悶然な者はなし、夫故如來は懇ろに悲嘆述懷なされたるが大經悲化段の御說法である、悲化段の出處は驕

慢、弊、懈怠の文である、左れば流通に其文は無けれ共佛意は必ずある筈故に、斯くは前後の經文を取合して作偈なされたものと味はゝれる、

扨、此に邪見、驕慢、惡衆生とあるは絶待的に佛法を嫌ふ樣な者のみを指したるに非ず、一往求むる心は有り乍ら、如實に信樂受持する場に至らぬ者がある、文軏に問答を設けたるを樸公が和會して、弘願の信樂受持し難きは自力の智解を絶離せず、久しく染著きし疑を離れぬ故なり、之を離れるには恩愛や



身財を捨る如き六ヶ敷事にあられ共、无上涅槃の大樂を求る志なき故なり、其意を示して甚以難との玉ふと、深切なる講話と謂つべし、因に信樂とは六要に俱舍光記と唯識論に據て信に二義あり、忍許(因)と愛樂(果)是なり、今謂信樂者卽此二意、受持とは義寂を引て、受は作心領納故、持者得記不忘故、疑がはぬが信、愛するが樂、心に受込むが受、忘れぬが持である、

難中之難無過斯とは八萬四千の諸佛の教道や、六

波羅密等の菩薩の勝法は、智愚平等に修行は出來ぬ法である、夫さへ難得難聞なれば、況して他力弘願の絶對法に値ひて如法に信受するは難中之難无過斯ぞとの意である、嗟、我等實に邪見驕慢の惡衆生なりしに、今此无上絶對の法に値ひて信受する身となれる事、不可思議の慶幸、不可思議の佛恩、喜びても尙喜ぶべき事にぞある、そこで此四句は只悲嘆して棄物にせられたのでなく、早く邪見を翻し驕慢を改めて謙敬聞奉行せよと裏手から勸める趣意なので、略抄の偈の惑染逆惡齊皆生、乃至如何疑惑斯大願唯信釋迦如實言の處と參照して味ふべし、以上大經の意に由て讃述するの一段了る、

印度西天之論家、中夏日域之高僧等、

是より七祖の勸讃を頌する偈文なるが、此四句は其惣標である、印度西天とは印度は日本より西に當る故に西天と稱したもの、西の天と云ふ義なり、論家は龍樹天親の二大士なり、凡て菩薩を論家と云ふは論文を作つて佛經を釋し夫で一家を爲すの義なり、

中夏は支那人古來の自稱である、中夏とも華夏とも稱して、中は四夏の中、夏は大の義、禮義の大、華は蠻夷に對して文華の邦と云ふ義なり、今は彼の自稱のまゝに彼邦を呼んだのである、日域は我邦の美稱で支那より名けたもの、楊子雲長楊ノ賦に西厭月髑東霄日域とある、推古天皇が隋朝への國書に、聖德太子が日出處の天子と書れたるは矢張り日域の義である、高僧とは智行の尊稱にして、曇鸞師以下の五祖を指したものなり、

顯二大聖興世ノ正意一の大聖は釋尊を指す、勦說に諸聖莫レ及故、佛體周二法界一曰レ大、智絕無レ昧故曰レ聖とあり、興世正意とは文軌に正意有二二重一、一者聖道爲レ傍、淨土爲レ正、二者於二淨土ノ中一餘爲レ傍、大本所レ說眞實之利爲二正意一也とあり、

明二如來ノ本誓應一レ機とは惣じては四十八、別しては第十八願なり、上の顯の字と此明の字は七祖が二尊の悲懷を發揮されし功烈を指したもの、應機とは機は根機なり、惣じては三時に通じ、別しては像末法

滅の時機に應ずる義と文軏に見ゆ、時機相應の要法たる事を明かにしたるが七祖の功なり、因に機の字は宜しきと云ふ義と、發動の義と、徴ざしの義とありて、衆生の事を機と云ふは法に對して云ふたものなり、應病與藥の佛法ゆへに、根機に應じて宜しき法ある故に、機は宜なり、又宿善開發せねば法は受られぬ故に、發動の義あり、徴ざしの義ありと五部評に見ゆ、面白きことなり、

釋迦如來楞伽山、至生二安樂一、



是よりは七祖の一一に就て勸讃の悲懷を頌する事なるが、今は第一に龍樹章である、此六句は龍樹菩薩の略傳と心得べし、高僧先德の志操や行迹を知るは大切なる事、我宗の僧侶は七高僧等の傳記を常に拜見すべき事は樸公の講述にも大に注意してある、傳記を知らねば其人の眞相は分り兼るなり、志操行迹を知れば之を慕ふ志も起るなり、此義等閑にしてはならぬ事である、因て茲に龍樹菩薩の略傳を述ぶる事とせん、此菩薩の傳記は羅什三藏の譯された傳と、

附法藏因緣傳と二通りが本傳なるが、本傳の方迚も委敷事迹は書て无いのは誠に遺憾な事なれど致方なければ、今は大綱丈を述て置くなり、其他西域記八、法苑珠林六十六等にも略傳あり、又禪宗眞言には別に相傳あり、他書と異なれ共上に擧る兩傳を正本とすべし、

龍樹は梵語では那伽阿周那と云ふ、(龍勝、龍猛とも譯す) 南天竺の婆羅門種族に生れた人である、富豪の家に生れて天性聰明奇悟とありて、幼兒の時から非凡な性質であつた、物事一度聽たら聞き直しはせられなんだとありて、二十歳の頃には當時印度に行はるゝ天文地理其他百般の學術技藝一として極めぬ事なく、俊傑として名譽は諸國に聞へたとある、然るに夫が爲めに驕慢を起して情欲を擅ひまゝにせんと世間の娛樂に望が出て來て、三人の親友と相談の末に隱身の術を學んで、窃かに國王の宮中へ忍込んで宮女を姦淫した所が、其事が發覺して他の三人は遂に殺されたが、龍樹は王の側に身を潛めて危き所を

免れられた、此時深く五欲の畏るべき事を悟り自ら誓を立てゝ、若し此を脱したらば出家して道を修行せんと決心せられたが、夫より直ちに山に入りて出家受戒せられて、三ヶ月間に小乘の經律論を研究して其深義を極め、更に餘の經を求められたれ共、南天竺には小乘の三藏より无かつたので、夫から北天竺に赴き雪山に入られたれば、寺の中に一人の老比丘ありて大乘の經典を龍樹に授けた、三論家の相傳にはかの比丘は馬鳴菩薩で有つたらうと云ふ事ぢや、



(證據未詳)、乃で龍樹は大乘經典を一心に研究せられて、大乘の實義丈は合點は出來たが、未だ安心開悟の地に至らぬ、左れ共學識辯才は益々上達して、外道異學を摧伏して他に匹敵がない、乃で自ら一切智人なりと思ひ、從前の經論では滿足せぬ所から新たに敷演の道を開き、時機に適應して弘通せんものと思ひ立ち、靜室に獨坐して工夫せらるゝ所を、大龍菩薩が出現して、龍宮へ引導して方等甚深の無數の經典を授けられたので、龍樹は亦三ヶ月間之を讀まれた處

が、頓に智解が開けて豁然大悟せられたとある、此時初歡喜地に入られたものであらう、夫より南天竺に歸りて外道を摧破し、國王を教化して盛んに大乘佛教を弘められた事である、此菩薩は非常な長壽で附法藏傳には假りに仙藥を飲みて現に長壽を住むる事三百餘年、任二持佛法一其所レ度人不レ可二稱數一と云ふてある、又西域記にも善二閑藥術食餌養生一、壽年數百、志願不レ衰と云ふてある、其在世は或は五百或は七百、其說不一、兎角非常の長壽なりしは疑ひ



なし、此菩薩の終焉に就ては、本傳では一の小乘の僧が大乘弘通の爲に常に嫉妬の念を懷いて居たが、龍樹は此世を去んとせられて彼僧に向ひ、汝は我在世の久しきを欲するやと尋ね玉へば、夫は願はぬと答へた、乃で龍樹は靜室に入て數日出られなんだゆへ、弟子が戸を破て入て看たれば早や此世を去て居られたとある、又西域記では憍薩羅國の引正王の太子が母に向ひて、父王が長命では我は何つ迄も卽位が出來ぬと恨みしに、母は愛念に引かされて申す樣、

父王の長命なのは龍樹の法を聞かるゝ故である、汝早く卽位を望まば龍樹に請ふて命を貰らへ、菩薩は慈悲深ければ必ず與へ玉はん、龍樹だに死なれば父王も命終せられんと、太子之を聞て龍樹に命を乞ふ、龍樹卽ち乾茅葉を以て自ら頸を切て失せ玉ふ、太子之を見て驚きて逃げ歸る、引正王之を聞て悲嘆の餘り直に命終されたとある、斯樣な事は傳聞の相違迚二千年の昔の事故是非を證明し難い、併し引正王が龍樹に歸依された事は慥かなる事で、菩薩が王の爲に偈文を作て佛法を勸められたのは今に傳つてある、龍樹遷化の後百有餘年、南天竺諸國で廟を立てゝ供養する事佛の如しと本傳に見ゆ、在世の時より無相好の佛と尊まれた御方である、又西域記に據れば、龍樹が憍薩羅國の伽藍に居られし時に、引正王は深く尊敬して衞士に寺門を守らせられたが、其時提婆菩薩が師子國より來りて論議を求められた、龍樹は稚きより其名を聞て居られた故、弟子に申附け水を鉢に一杯盛りて提婆に示された所が、提婆は默然と

針を水中に投じた、弟子は怪みて持返り之を龍樹に告げたれば、龍樹は深く感じて提婆を之へ案内せよと申された、弟子其故を問ふに、龍樹曰く、水は器に隨て形を變じ物に從て清濁なり、滿ちて間だてなく澄渡りて測るなし、鉢に滿てゝ示したるは我智の圓滿に比したのである、然るに彼が針を投じたるは我底を窮めんとの志を示したるなり、是れ凡人に非らず早く呼び入れよと、提婆堂に昇り謙遜して片偶に坐し、終日談論されしに、龍樹は提婆の學問辯才非凡なるを見て、我身已に衰老に及びたるに、斯る英才に遇ひて瀉瓶其人を得たりと深く喜び玉へば、提婆は龍樹の道德高きに恐れ入り、序を下り無禮を謝して門人に列ならんと願はれた、乃で龍樹は提婆に向て、汝に至眞の妙理法王の誠教を授くべければ故の座に復れよとの玉へば、提婆は五體を地に投げ一心に歸命して、而今而後敢て命を聞んとありて如來の法脈を相承せられたと云ふてある、師資の風采擧動の慇懃なる想像するに餘りあり、扨、又附法藏傳には龍樹を

第十二祖として、迦毘摩羅尊者から佛法を相承せられたとある、迦毘摩羅は馬鳴の弟子なれば、龍樹は馬鳴の孫弟子になるのである、三論、天臺、華嚴、眞言、禪宗、淨土宗等は悉く此菩薩を開祖と崇む、眞言では本地妙雲相佛とも（金剛正智經）又は徧覆初生如來（大莊嚴三昧經）とも申す、我宗では楞伽の懸記に應じて極樂に往生し玉ふ淨土の初祖と崇むるなり、曇鸞師の讃に、本師龍樹摩訶薩云々、芳化を蒙り高迹を慕ふ吾人は特に尊重恭敬し奉るべきぢや、漢献帝



建安二十五年、神后二十年、

釋迦如來楞伽山とは、初めに世尊の懸記を擧げて龍樹の價値を知らしむ、因人重法の義である、世尊の懸記は楞伽經に見ゆ、此經に三譯あつて宋譯を四卷楞伽と云ひ、魏譯は十卷、唐譯は七卷なり、魏唐兩譯に懸記を載せてある、魏譯の第九卷に、我乘內證智、妄覺非境界、如來滅世後、誰持爲我說、如來滅度後、未來當有人、大慧汝諦聽、有人持我法、於南天國中、有大德比丘、名龍樹菩薩、能破有

無見、爲人說我乘、大乘無上法、證得歡喜地、
往生安樂國とあり、唐譯同之、

今偈は右の經說を六句に頌したのである、因に楞伽山と云ふ山は南海の濱と經文にあれ共、元來楞伽は不可往と譯して、凡人の往かれぬ山と云ふ事なれば、實際の山とは思はれぬ、大乘經典の所說は多くは凡夫の往かれぬ所に成つてある、是は法の尊高を表する爲に斯樣に傳へてあるので、たとひ實際の山あり共、其山に拘はらず甚深の法を表したものと



合點すべきぢや、

扨、六句の偈文は解し易し、此中で悉能摧破有無見の句に就て、有无の見とは如何なる事ぞ、是は五部評に勦說を引て委敷云ふてある、大要は一切の見は四句を出でず、卽ち有の見と、无の見と、亦有亦無と、非有非無とである、此四句をたゝぬは有無の二見である、此四見は外道計りでない、天臺の止觀には藏通別圓の四教に各々此四句あり、合して十六門と云ふ、一文を捉へて執ずると甘露反て毒藥となる、

先づ圓教で云へば一切有佛性と說て、一物ありと認めたら直ちに有の見なり、佛性ありと認めたらば妄見である、又趙州和尙の樣に狗子に有二佛性一乎、答ふ无しと、斯樣に云はゞ空見の外道なり、爾らば佛性は有とも無とも非有非無とも止れば見惑なり、亦有亦无と云はゞ妄想なり、一物でも心を止めると外道である、爾らば无言說かと云へば、無言說と止めば直に邪見である、夫に一念も妄執を止めねば有と云ふも圓教の妙に叶ふ入方便なり、无と云ふも諸法寂滅なる故に一佛乘に契ふ入方便なり、或は无明を空と云ひ佛性を有と云ふ、(法相)(涅槃)或は无明を有と云ひ佛性を空と云ふ、何れでも足を留めると妄想顚倒の境界である、佛法に附て云ふ計りでなし、外道の有无の執を忘れると直に佛法なり、邪正同一にして其場所に至ては內外の敎はなし、內外を論ずるは昨日の夢なり、勝論數論も華嚴法華なり、執を留めれば法華華嚴も數論勝論なり、斯く地體は有り乍ら佛法からは有无の見は外道と云ふ、大乘から見

れば小乘の倶舍成實の爭は有无の見ぢや、有无は常見斷見なり、是に倶生と分別との二つがある、倶生は生れ附に具はる、分別は思按して起り、書物や師匠から出で來る見なり、此事は唯識六に出づ、須陀洹の聖者でも雷聲を聞いて怖れるは倶生の斷見なり、蚊虻の類にもあるなり、禽獸等の食物の用意するは常見なり、乃至凡夫が明日ありと思ふは常見なり妄情なり、念々に百一の生滅ありて一念も止まらず、先きの僧樸は今の僧樸に非ず、持てる扇子も前のは後のに非らず、皆生滅して切々なるもの、其切々の當處に動かぬ者あり、又云ふ外道の所立にも佛法僧の三寶も立て、或は法報應の三身も立つ、大自在天を法身とし、那羅延天を報身とし、梵天を應身とす、何も角も外道にも云ふ、此外道の所計を知らねば佛法と外道との邪正が分けられぬなり、近くは外道と云ふて外に在るのでない、今日の妄想顚倒一念も起れば夫より種々の計度をするが直ぐに數論勝論の外道なり、遠き天竺迄尋ぬるに及ばぬ、佛學者は時々

坐禪して我心裏を思惟すべしと、實に活きたる講話なり、能々味ふべし、

扨、又宣二說大乘無上一法一の句に就て楞伽經の大乘无上法とあるを眞言には秘密敎の事に取り、天臺には三諦圓融の法に取り、三論には八不中道に取るを蹄涔に評して、龍樹は八宗の祖なれば、各々に我宗の法義に取るは尤にして一月三舟の喩の如し、妨げはなし、乍去次の往生安樂國の文より見れば、他力一乘と云ふが義に於て親しと云ふてあるは至極同感なり、殊に楞伽の十方刹土の諸佛の三身を皆從二無量壽極樂界中一出と說ける文と、大經の華光出佛の相と符合すれば、龍樹も極樂界中出の大士なれば、宣說し玉ふ無上法は彌陀弘願の法なる事明かなりと僧樸師の說明は何人も否と云はれぬ事なるべし、

顯二示難行陸路一苦、信樂易行水道一樂一、

此二句は十住論易行品の意にして、難易二道の判釋は他力門に於ける一大法義なる事、何人も能く知る所なれば贅辯を省く事とす、高僧和讃、龍樹大士世

に出でゝ乃至乘せて必ず渡しける迄の四首と參照して味ふべし、水道樂の三字は易行の他力なるを喩へ顯はしたのである、

但し此二句の讀み方を難行の陸路は苦くして信樂易行の水道は樂しき事を顯示し玉ふとよむべしと五部評に見へたり、若し易行水道の樂を信樂すと讀む時は、信樂の二字は正信にして易行の二字は念佛に成る、夫にても仔細なけれ共、論に信方便の易行と說き、曇鸞師が信佛因緣と釋せられたる邊に約する時は信方便卽易行、信佛卽因緣の義にして、願力易行の至極は信心一つと云ふ事を合點するには今の如くに讀むが宜しきなり、

憶二念彌陀佛本願一至弘誓恩、

此四句は易行品一部の主眼骨髓を述べて一章の結文とせられたもので、上の信樂易行水道、樂の義を此四句に敷演し、他力眞宗の正信念佛の極意を示された要文である、此文の出所は易行品の阿彌陀佛、本願如レ是、若人念レ我稱レ名自歸、卽入二必定一得二阿耨多

羅三藐三菩提、是故常應憶念の文と同じき偈中の人能念是佛無量力功德、即時入必定、是故我常念の文とを取合せて造語せられたものである、扨、憶念と云ふは唯識では五別境の中の念の心處の事で、此念の心處は曾習の境に於て心をして明記ならしむとありて、決定勝解の儘を何つ迄も慥かに記憶して忘れぬ所の働きであるから、實は後念相續の事である、即ち論文の常應憶念とあるが夫なのぢや、爾るに今偈では憶念念彌陀佛本願と句を起して次に自然即時入必定とあれば、初一念の事に此二字を使はれたのである、因て字義に叶はぬでなきかとの不審がある、勦說に之を釋して云々せり、其意に據れば是は如實の信を顯はさんとて相續の文字を初歸の所に使用せられたのである、其譯は縱ひ一旦は踊躍歡喜しても夫が一形相續せずして遂に抛擲して仕舞やうでは明記不忘とは云はれぬ、夫ならば正信を得たのではない、最初の一念が正信ならば必ず後々相續が出來る、して見れば後念は一念の樣通りで

あるから、眞との信心は初後不二である、初後不二なれば最初の一念に一形相續の義は具はる道理故に、今は憶念の二字で初歸の信を顯はされたと云ふ事なり、是で殊に難有き思召を味ふ事が出來る、彌陀佛ノ本願は第十八願なり、憶念は至心信樂なり、論の長行では之を念我と示し、偈頌では念ニ是佛ノ無量力功德ニと示して、初歸も後念も共に念の字で示してある、故に今も之に據つて造語せられた事と知るべきぢや、

自然卽時入ニ必定ニは、自然とは一に法爾の義、彌陀願力の然らしむるを云ふ、二に因果必然の義、憶念彌陀佛の因あれば必定の果は自然にあると、諸註皆同じ、必定は不退の位なり、

唯能等の二句は論の長行では是故常應憶念と云ひ、偈文には是故我常念とある、常應憶念の方は願文を紹介せられ、我常念は龍樹の御自督の方である、今祖師は此二文を合して龍樹の衆生を勸め玉ふ詞に造語して、夫の思召を道俗時衆に傳示せられたもので

ある、是で信前信後を分明ならしめ、正信念佛の實義を誤らぬ様になる、何とならば易行品の儘では心得ぬ者が動もすると定散の信心に止まり、自力稱名に流るゝ恐れがある、能く文意を得れば正信念佛の眞意に叶へ共、左なき時は相對的法門と誤解する者ある故に、末句に應報大悲弘誓恩と示して他力頓極の信心を得たる上には、稱名は信心の相續に外ならねば、稱ふる心持は大悲の恩海を念報するより外に餘念なき者ぞと云ふ事を知らせられたのである、

扨、唯能等とは、五部評に文軌を引て、凡報佛恩有無量行、而多是衆生所不堪也、所不堪者均爲難事等と、堪の字で能の字を註釋したもの、稱名は誰でも出來る易き仕事で、報謝に叶ふは稱名である、乃で唯能とは是さへ出來ればと云ふ意味である、又常の字は行往坐臥を擇ばぬこゝろ、稱は稱譽稱讃抔と熟して譽る心持の字である、今はとなへ呼出す事なり、信後の報恩に餘事は出來ぬ共嘆くに及ばぬ、

只稱名さへ出來れば夫で大悲弘誓の恩は報ぜらるゝぞと云ふ意なり、文軌に又報恩の念佛の事を釋して、此行助二揚佛化一故成二報恩一也、報恩經曰、莊二嚴菩提一利二益一切衆生一爲レ念二佛恩一爲レ報二佛恩一とあり、僧樸師又曰、此二句を四修に配せば、唯は無餘無間なり、他物を交へぬは無間なり、法體一つに取附くは無餘なり、常は長時修なり、報恩は恭敬修なり、此二句に自ら四修を具せりと、難有き釋である、



## 天親菩薩傳、

眞諦譯の本傳に據れば、天親は北天竺丈夫國の人とある、西域記では無著菩薩を中印度健陀羅國の人とあれば、天親も同國の筈なれ共、今は本傳に從ふべきぢや、丈夫國の國師たる婆羅門に嬌尸迦と申す人があつた、是が無著天親等の父君である、三人兄弟にして第一が無著、第二は比隣持跋婆と云ふ、第三が世親菩薩である、無著は梵語を阿僧伽と云ふ、世親は

婆藪槃豆である、三人共に小乘薩婆多部で出家せられたるが、無著は後に早く大乘に轉ぜられた、第二の比隣持も博學多聞で英才無儔、戒行淸高な人であつた、當時頻娑河住と云ふ外道が阿輸闍國に入て佛敎徒と議論の末、外道勝利を得て國王の歸依を受けた(數論)、其後外道は僧佉論を著して我身の壞れぬ間は此論も壞れぬ樣と龍王に祈願し、死して石と成つた、此時分に天親は罽賓國に出でゝ修行中なりしが、還て此事を聞き大に憤慨せられ、金七十論を



造つて、僧佉論を辯駁せられたれば、外道の餘類は一句も答へ得ず、國王三洛沙の金を以て天親を賞せられ、其金を以て國中に三寺を起して佛法を恢復された事である、其後俱舍の偈文を造つて罽賓の學者に送られたれば、彼等は我有部の敎義が他國に弘まる迚大きに喜び、更に釋文を求めた、乃で世親は再び釋文を造て送られたのが俱舍の本論である、此論中に有部の非なる處は經部の義で破釋せられた事は八宗綱要に記する如くである、當時阿輸闍國の正勤日

王が論主に歸依して、太子に命じて論主に戒を受けさせられた、又王妃が出家して論主の弟子となられた、太子が卽位して新日王と申したるが、母子共に論主に向つて阿輸闍國に留りて供養を受玉へと請はれた、論主は之を許諾なされた、王の妹夫に婆修羅多と云ふ婆羅門が有て、畏迦羅論を以て俱舍を破せしに、論主は固より毘迦羅論を學で居られた故に、直に破釋して毘迦羅論を摧かれたれば、王母子各々論主に金を施された、乃で論主は此金(三洛沙)を三



分して丈夫國と罽賓國と阿輸闍國の三國に各々一寺を立てられた、婆羅門は大に忿つて天竺より僧伽跋陀羅法師を招き、光三摩耶論壹萬偈(義類論)隨實論十二萬偈を造て有部の義を救ひ俱舍を破して論主と面り論決せんと申込みたるも、論主は取るに足らぬ事とし論の優劣は智者自ら知るとあつて面論せられず、

扨、論主は小乘十八部の義に通じて其深味を解し、小乘を執じて大乘非佛說の意見を立てられしが、無

著菩薩は論主の聰明絶倫にして學識深廣なる故に論を造て大乘を破壞せんかと恐れ、使を阿輸闍國に遣し我が疾篤し急に來れと呼び玉ふ、論主歸國し疾を問はるゝに、無著答て、我れ今心に重病あり汝に由て生ぜり、論主其由を問ふ、曰く、汝不レ信二大乘一恒生二毀謗一、以二此惡業一必永淪二惡道一、我れ之が爲に愁ひて命を失はんとすと、天親之を聞いて驚き惶れ、大乘を解說せん事を請はれし故、無著は大乘の要義を略說されたれば、論主一を聞いて十を悟り、忽ち大乘の妙理が遙に小乘に過ぐる事を合點し、之より遍ねく大乘を學んで兄と意見一致し、自ら昔日大乘を謗りたるを悔み、舌を割て罪を謝せんとす、無著の申さるゝ樣は、汝の舌能く巧みに大乘を謗せり、汝若し罪を滅せんとならば善巧もつて大乘を解說せよと、論主は敎に從ひ無著の歿後論を造りて華嚴、法花、涅槃、般若、維摩、勝鬘等の諸經を釋し、又唯識、攝大乘等の論を著して大乘を弘通せられしが、論主の著述は文義精妙にして見聞の者信向せざるなく、天竺及

び邊土大小乘を學ぶ者悉く論主の書を以て研究の柱石とし、異部外道の論師等論主の名を聞て畏伏せざるはなし、論主は八十才にして阿踰闍國に命終し玉ふ、迹を三賢に托すれ共實は深位の菩薩也と云へり、世に此菩薩を干部の論師と申すなり、淨土論は論主晩年の作と見ゆ、自信教人信の論文なれば殊に尊信すべきなり、此菩薩の出世は佛滅九百年にして支那南宋武帝永初三年なり、

天親菩薩造〻論說、乃至彰二一心一、



此より第二祖天親菩薩の章である、初の一句は論主の淨土論を著述せられた事を標して下の文を呼起したものである、銘文に世親菩薩彌陀の本願を釋し玉へる御ことを論と云ふなり、乃至此論を淨土論と云ふ、又往生論と云ふなりとある、是は二名あれ共具さには往生淨土論なるを分つて二名とし玉ふと、此說よし、論主自ら往生を願ひ、又一切衆生を勸めんが爲に著述せられた論文であつて、元祖は三經一論と稱して三經に次で淨土宗正依の論文と崇められ、

祖師又之を相傳して特に尊重の旨を表せられたる事本典等に見ゆ、是れ龍樹の易行品は傍明の御裁なるに反し、今論は專ら彌陀他力の一教を述べて餘教餘佛に渉らぬ故に、之を淨土の正依大論と定められたものである、

歸二命無碍光如來一とは、願生偈の第二第三の二句を一句につゞめて論主の彌陀に歸命せられたる事を讃嘆せられたのである、此の彌陀に歸命する事が論主造論の大本意なるが故に、最初に之を擧げて論主の



弘通が自信教人信なる事を顯はしたのである、扨、夫に附て願生偈の振合と今偈の振合とを合點せねばならぬ、先づ願生偈では最初に世尊我一心乃至安樂國と自分の領解を述べて、夫より我依修多羅等と斷りて廣く淨土の三種莊嚴を讃嘆して、終りに普共諸衆生等と結んで、教人信の勸化を長々と述べられたるが願偈の大體であるから、願生偈を束ねて云へば最初の四句は論主の自信にして、餘の九十二句は教人信と云ふべきぢや、爾るを今偈は祖師が天親

菩薩の自信教人信の勸化を讃述せらるゝのであるから、此時は論主の自信も教人信も丸めて化他の姿たとして讃述せられたものである、夫は元來自信教人信迚二つあるのでない、自信を他に示せば卽ち教人信となり、教人信が其まゝ自信の外はなき事である、なれ共言句の上に附て分別する時は、姑らく自信の言句と教人信の言句と其差別はある事なるゆへ、夫は合點し置ねばならぬ、乃で今此歸二命无碍光如來一の一句は願偈の最初なる四句の意をつゞ



めて論主自信の趣きを祖師が讃述なさるのである、天親菩薩論を造つて說かくとある上の句を承け、无碍光如來に歸命し奉ると一論の本體主腦が此一句に在る事を認めて斯くは讃述されたもの、問て曰く、何故に初後の二句を省きて中間の二句を擧げ玉ふや、答、私に案ずるに初の句は論主が釋尊の敎勅に順じて、自信敎人信する事を世尊に表白して佛の加被を乞はるゝのであるから、大切な句に違いなけれ共、世尊の敎に順ずるの肝心は无碍光如來に歸命する

の一事なれば、中間の二句を擧ぐれば初の句は自ら籠る譯である、又彌陀に歸命するからは願生は云ふに及ばず、夫故後の句をも略して主要たる中間二句を擧げて論主の自信卽教人信たる事を讃せられたものと味はゝれる、猶又我一心の三字は自督の詞と曇鸞師も釋して肝心の文字なれど、是は歸命の字に攝めて論主の自督を顯はし、次の教人信の處で爲レ度二群生一彰二一心一と讃述せられたるは用意周到と味ひ奉る、略鈔の偈は此句を入れず、論主の化他の方の



みで頌してある、今偈は論主の自信教人信の趣きを具足して頌せられたものである、扨、願偈には歸命盡十方等とあるを、今盡十方を略したるは偈句窄きが故にと舊註に云ふが如し、扨、又五念門配當の上では、歸命は禮拜なり、无碍光如來は讃嘆門なれど、今は五念門の格で頌したのではなく、只信心を顯はしたものと云ふ事も舊註(要訣)に見ゆ、私も左樣に味ふ、爾れば无碍光如來に歸命し奉るとあるが論主の御安心を表示せられたものと見るがよし、今偈の

初の二句が全く此趣なる事合せて味ふべし、時に无碍に付て圓融と自在との二意ありて、衆生の煩惱中へ自由自在に入込み玉ふは自在无碍なり、能く入込む故に煩惱の氷解けて卽ち菩提の水となり、障り多きに德多きは圓融无碍なりと霖師の十二光義を引きて五部評に注意してある、難有き事なり、

依二修多羅一顯二眞實一、光二闡横超一大誓願一、是よりは論主の教人信の方を讃述せらる、上の一句は願偈の成上起下の四句に依て、今章の上でも矢張り成上起下



の句として造られたのである、云何上を成すとならば、上の歸命无碍光如來を承けて斯く无碍光如來に歸命すとあるが、全く修多羅に依て眞實を顯はしたものぞとなり、何故に无碍光如來に歸命すとあるが眞實を顯はす事になるやと云ふに、歸二命无碍光如來一と論主が自督を表白せられた處で、夫が直ちに如實の讃嘆である、南無阿彌陀佛の名號を彼の光明智相の如く讃嘆して盡十方无碍光如來と名けられた、是が卽ち眞實功德相である、故に　祖師は眞實功德相と

申すは誓願の尊號なりと釋せられた、十二光明の中に就て、特に无碍の一光を擧げて之に盡十方の三字を加へられたるは、觀經の光明遍照十方世界の文、小經の照十方國无所障等の文を以て大經の无碍光佛と綜合して、本願成就の南無阿彌陀佛の德用無窮なる事を顯はされたのであるから、之を依二修多羅一顯二眞實一と云はねばならぬ、是で成上の義を合點すべし、起下と云ふは、次の光闡横超以下の句が顯眞實の所由である、何故に无碍光如來に歸命するぞとならば、下に云々するが如き他力頓極の功德利益あるが故にと云ふ意である、恰も因明の宗因の如く、上の歸命无碍光は一論の宗體にして、下の光闡横超等は因故である、宗ありて因故なきは其宗安立せず、宗因具足して所立始めて確定する事である、今も其格で味ふべきぢや、是で起下の義は明白なり、扨、修多羅とは三部經なり、之に依るとは論註に何所依、何故依、云何依の三體を以て釋してある、何所依は三部經に依るのぢや、何故依は如來は眞實功德相であるから

依るとなり、云何依は五念門の行を修して相應するが故にとある、是で依修多羅の四字は濟んだ、次に顯眞實に附て、眞實の二字は論偈の眞實功德相の五字を縮めたのである、顯の字は論主が三經に依つて彌陀の眞實功德を顯はされたるを祖師が讃嘆なさるのである、爾るに論の眞實功德を鸞師釋して功德に二種あり、一に凡夫有漏の善根功德は法性に順ぜぬ故に因果共に虛僞顚倒してあるから不實の功德である、二に菩薩般若無漏の智慧から起つた莊嚴佛事は



法性に順じてある故に、虛僞顚倒でないから之が眞實功德ぢやと申された、卽ち三經に說かるゝ彌陀淨土の三種莊嚴が法藏菩薩淸淨の願行から出來上りて、因果共に淸淨眞實にして衆生に大饒益を施し玉ふ故に、是に依て自行化他せんとあるが論主の據り所である、處で祖師は眞實功德相とは誓願の名號なりと銘文で釋せられた、是は廣略の相違で、曇鸞師は三種莊嚴で眞實を釋し、祖師は尊號で釋せられた、卽ち上に云ふ成上起下の相違なので、祖師は歸命旡碍

光の方で眞實功德を釋し、曇鸞師は光闡横超以下で眞實を釋せられたので、之を眞俗二諦とも云ふ、尊號は眞諦なり、三種莊嚴は俗諦なり、爾るに此二諦相卽不離であるから、其實は一つ事である、扨、其顯眞實の廣說は以下の諸句を看よ、

光闡横超等とは、廣說中に於て此句が又大本となり、以下の句は是から出たものなり、扨、上には歸命无碍光と名號で宗體を示し、今は又本願を擧げて名號の本を明かす、所謂る本願や名號や〳〵本願とは此事である、何故に无碍光如來に歸命せるや、横超の大誓願を滿足し玉ふが故にと、かういふ明し方である、扨、光闡とは五部評に光は廣也大也、闡は開き顯はす義と云ふ、良し、横超の二字は二双四重の釋に於て第四重が横超である、卽ち竪出横出で一双、竪超横超で又一双、是は擇瑛善導二師の釋義に據て祖師が聖淨二門の敎相を判釋せられた名目なる事二卷鈔に出づ、竪出は聖道門の中で三乘權敎の修行證果に名づけ、横出は淨土門中の萬善諸行化土の往生

に名づけて、聖淨異なれ共俱に方便漸教である、竪超は聖道門中實大乘教の卽身(成佛)頓悟の教に名づけ、横超は淨土門中他力絶對の教に名づけたもの、超の義同じと雖も彼は自力に由る故に竪と名づけ、此は他力絶對であるから横と名づけたのである、大誓願とは第十八願なり、十八を五に開けば五願が卽ち夫である、又十八と四十八と廣略相入の邊より云へば、六八を全ふして横超、大誓願である、爾るに論文の上に横超の名目なし、是は義に由て名けたもの



なり、其義とは蹄涔記に能令速滿足(功德大寶海)の偈文を擧げて横超の義と釋し、五部評に之を引いて横超は横飛にして大論に云へる神通乘也、神通に乘れば卽時に十方に至る、天臺では之を圓教の極談とし、密教では卽身成佛の義とす、今家では神通乘は佛願横超の義なり、此速の字を經には一念と云ひ、滿足を經には具足と說く、此横超とは不虛作住持の功德なりと云ふてある、難有き釋なり、不虛作住持の功德は若不生者の誓願の結果である、左れば横超の